

八千代市向境遺跡・雷遺跡・ 阿蘇中学校東側遺跡

-県単道路改良委託(幹線道路網整備)(主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査) -

平成19年2月

千葉県県土整備部
財團法人 千葉県教育振興財團

や　ち　よ　むかいさかい　らい
八千代市向境遺跡・雷遺跡・
あ　そ　ちゅうがっこ　ひがしがわ
阿蘇中学校東側遺跡

-県単道路改良委託(幹線道路網整備)(主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査)-



序 文

財團法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告書第562集として千葉県千葉地域整備センターの主要地方道千葉竜ヶ崎線道路改良事業に伴って実施した八千代市向境遺跡・雷遺跡・阿蘇中学校東側遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の遺物集中地点や弥生時代の住居跡が出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また郷土史の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成19年2月

財團法人千葉県教育振興財団
理事長 岡野孝之

凡　　例

- 1 本書は、千葉県千葉土木事務所（千葉県千葉地域整備センター）による主要地方道千葉竜ヶ崎線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

向境遺跡	千葉県八千代市米本字北ノ台地先（遺跡コード221-023）
雷遺跡	千葉県八千代市米本字下宿東地先（遺跡コード221-025）
阿蘇中学校東側遺跡	千葉県八千代市上高野字平沢144-3ほか（遺跡コード221-028）
- 3 発掘調査から報告書作成に到る業務は、千葉県千葉土木事務所（千葉県千葉地域整備センター）の委託を受け、財團法人千葉県教育振興財團が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者と実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆編集は、上席研究員 森本和男が行なった。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県千葉土木事務所（千葉県千葉地域整備センター）、八千代市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

国土地理院発行 1/25,000地形図「白井」(N-54-19-14-3), 「小林」(N-54-19-14-1), 「習志野」(N-54-19-14-4), 「佐倉」(N-54-19-14-2)	八千代市役所発行 1/2,500「八千代都市計画基本図」
--	------------------------------
- 8 遺跡周辺航空写真是、京葉測量株式会社による1967年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位と座標値は、すべて日本測地系である。
- 10 本書で使用したスクリーントーン及び記号の用例は、挿図中に記した。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査の経緯と経過.....	1
2 調査成果の概要.....	2
第2節 遺跡の位置と環境.....	7
1 地理的環境.....	7
2 歴史的環境.....	7
3 周辺遺跡の調査.....	19
第2章 向境遺跡、雷遺跡.....	25
第1節 向境遺跡.....	25
第2節 雷遺跡.....	25
第3章 阿蘇中学校東側遺跡.....	29
第1節 旧石器時代.....	31
第2節 縄文時代.....	37
第3節 弥生時代.....	48
第4章 まとめ.....	50
報告書抄録	

挿図目次

第1図 グリッド呼称図(1/40).....	2	第10図 奈良・平安時代遺跡分布図	
第2図 雷遺跡、トレンチ・グリッド設定、造構分 布図(1/2,000)	3	(1/25,000)	16
第3図 阿蘇中学校東側遺跡、グリッド設定図 (1/2,000)	4	第11図 中近世遺跡分布図(1/25,000)	17
第4図 阿蘇中学校東側遺跡、上層確認トレンチ設 定、造構分布図(1/1,000)	5	第12図 向境遺跡・雷遺跡周辺の遺跡 (1/10,000)	19
第5図 阿蘇中学校東側遺跡、下層確認グリッド、 本調査区設定図(1/1,000)	6	第13図 雷遺跡・阿蘇中学校東側遺跡周辺の地形 (1/5,000)	21
第6図 旧石器時代遺跡分布図(1/25,000)	8	第14図 阿蘇中学校東側遺跡の周辺調査	
第7図 縄文時代遺跡分布図(1/25,000)	10	(1/2,500)	23
第8図 弥生時代遺跡分布図(1/25,000)	12	第15図 向境遺跡の周辺図(1/2,500)	26
第9図 古墳時代遺跡分布図(1/25,000)	14	第16図 向境遺跡、溝(1/200)	27
		第17図 向境遺跡出土遺物	28
		第18図 雷遺跡、道路状造構(1/100)	28

第19図	I層柱状図(1/40).....	29	第27図	C区石器集中地点(1/80).....	38
第20図	A区石器集中地点(1/80).....	30	第28図	C区出土石器.....	39
第21図	A区出土石器(1).....	32	第29図	縄文時代上坑(1/40).....	45
第22図	A区出土石器(2).....	33	第30図	上坑出土遺物.....	46
第23図	B区石器集中地点(1/80).....	34	第31図	トレンチその他からの出土遺物.....	47
第24図	B区出土石器(1).....	35	第32図	SK-01住居跡(1/80).....	48
第25図	B区出土石器(2).....	36	第33図	SK-01住居跡出土遺物.....	48
第26図	B区出土石器(3).....	37	第34図	SD001溝(1/80).....	49

表目次

第1表	IH石器時代遺跡一覧表.....	7
第2表	縄文時代遺跡一覧表.....	9
第3表	弥生時代遺跡一覧表.....	13
第4表	古墳時代遺跡一覧表.....	13
第5表	奈良・平安時代遺跡一覧表.....	15
第6表	中近世遺跡一覧表.....	18
第7表	阿蘇中学校東側遺跡周辺の遺跡調査.....	20
第8表	石器組成表.....	40
第9表	石器一覧表.....	41

図版目次

図版1	遺跡周辺航空写真(1967年)	土坑002
図版2	向境遺跡、溝	土坑003
	向境遺跡出土上遺物	土坑004
	雷遺跡、道路状遺構	住居跡SK-01
図版3	阿蘇中学校東側遺跡、調査前風景	図版6 A区出土旧石器
	調査風景	図版7 B区出土旧石器(1)
	旧石器時代石器集中地点A区	図版8 B区出土旧石器(2)
図版4	旧石器時代石器集中地点B区	図版9 C区出土旧石器
	旧石器時代石器集中地点C区	図版10 縄文時代上坑出土遺物、トレンチなどの出
	旧石器時代石器集中地点C区十層断面	上遺物、弥生時代住居跡出土遺物
図版5	土坑001	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

県道（千葉竜ヶ崎線）道路改良事業の実施に当たり、千葉県千葉土木事務所（平成16年4月より千葉県千葉地域整備センターと改称）は、千葉県教育委員会へ路線内に所在する埋蔵文化財の所在有無の照会を行なった。現地踏査の結果、向境遺跡と雷遺跡、阿蘇中学校東側遺跡が所在することが確認された。県教育委員会は、県千葉地域整備センターと埋蔵文化財の取扱について協議し、記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査は、財団法人千葉県教育振興財団が実施することとなり、以下のとおりに向境遺跡と雷遺跡については平成11年度、阿蘇中学校東側遺跡については平成16年度から平成18年度まで調査を行ない、3遺跡の整理作業を平成17度と平成18年度に行なった。

発掘調査

向境遺跡

平成11年度 調査面積103m²、調査期間 平成11年7月1日～7月16日

調査部長 沼澤 豊 北部調査事務所長 折原 繁

担当職員 副所長 加藤修司

雷遺跡

平成11年度 調査面積1,200m²、調査期間 平成11年7月16日～7月31日

調査部長 沼澤 豊 北部調査事務所長 折原 繁

担当職員 副所長 加藤修司

阿蘇中学校東側遺跡

平成16年度 調査面積2,495m²、調査期間 平成16年11月16日～12月15日

調査部長 矢戸三男 北部調査事務所長 古内 茂

担当職員 上席研究員 南宮龍太郎

平成17年度 調査面積1,670m²、調査期間 平成17年11月1日～11月15日

調査部長 矢戸三男 北部調査事務所長 古内 茂

担当職員 上席研究員 森本和男

平成18年度 調査面積429m²、調査期間 平成18年6月20日～6月30日

調査研究部長 矢戸三男 北部調査事務所長 古内 茂

担当職員 上席研究員 田井知二

整理

平成17年度 整理期間 平成18年1月4日～2月28日

調査部長 矢戸三男 北部調査事務所長 古内 茂

担当職員 上席研究員 森本和男

平成18年度 整理期間 平成18年7月3日～8月31日

調査研究部長 矢戸三男 北部調査事務所長 古内 茂

担当職員 上席研究員 森本和男

2 調査成果の概要

向境遺跡の調査は、県道わきの南北にのびる細長い調査範囲であった。平成7年度に214m²の調査を行ない⁽¹⁾、古墳時代の住居跡1軒、中世の溝2条、道路状遺構1条が検出された。平成11年度の調査ではその南側の103m²を調査した。調査範囲内に任意に4本の測量杭を南北に設定して、調査を実施し、溝2条が検出された。

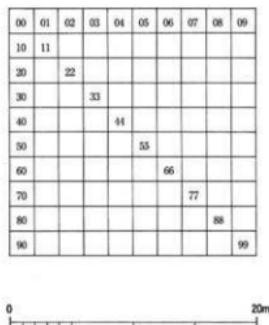
雷遺跡は、平成9年度に幅約20m、長さ約200mの道路予定地内的一部分に相当する5,563m²の範囲を調査し、溝状遺構1条が検出された⁽²⁾。平成11年度の調査では、残っていた中央の未調査部分1,200m²について、調査を実施した。発掘は、国土地理院の国土座標を基準に設定した20mの大グリッドに基づいて測量杭を設定して、調査を行なった。20mの大グリッドを西から東にA、B、C・・・、北から南に1、2、3とし、大グリッドを1A、2Bと呼称した。大グリッドをさらに2m×2mの小グリッドに分割し、西から東へ00、01、02、03、04、05、06、07、08、09、北から南へ00、10、20、30、40、50、60、70、80、90と100区分に分けた(第1図)。幅2mのトレンチを設定して上層の確認調査を行ない、大きさ2m×2mのグリッドを設定して下層の確認調査を行なった(第2図)。調査で中近世の道路状遺構1条が検出された。

阿蘇中学校東側遺跡の発掘は、平成16年度から平成18年度にかけて3回に分けて行なった。調査対象範囲に国土地理院の国土座標を基準に、20mの大グリッドを設定してから実施した。雷遺跡の調査と同様に、大グリッドを西から東にA、B、C・・・、北から南に1、2、3と命名し(第3図)、さらに大グリッドを2m×2mの小グリッドに分割して調査を実施した。

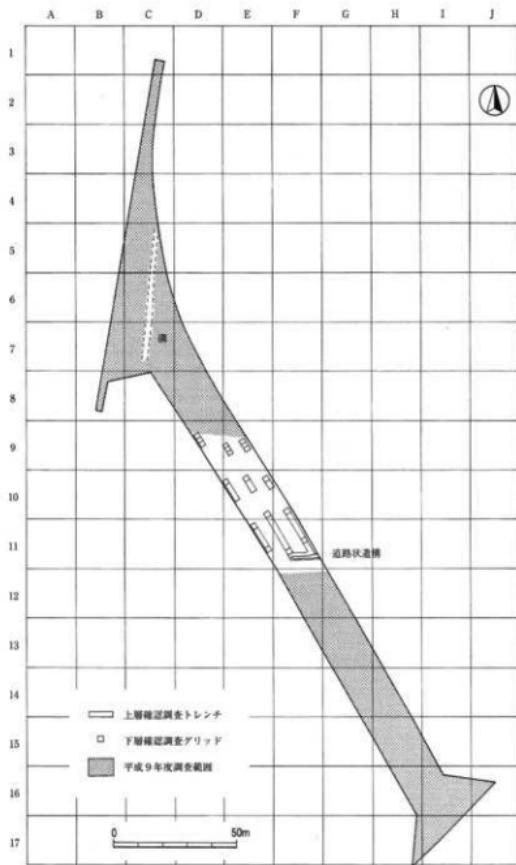
平成16年度は北側の2,495m²を調査した。上層の確認調査は、全体の調査面積の10%に相当する面積に、幅2mのトレンチを設定して実施した。調査区北側のトレンチから弥生時代後期の住居跡が1軒確認された。この住居跡は集落跡の一部と思われるが、その他に遺構が検出されなかったため、住居跡周辺を拡張して確認調査で終了した(第4図)。

下層の確認調査は、大きさ2m×2mのグリッドを深さ約1.8m掘り下げて、旧石器時代石器集中地点の存在有無を確かめた。確認グリッドを調査面積に対して約3%設定して実施した(第5図)。調査区北西の3か所のグリッドから旧石器時代の石器が検出された。石器の出土したグリッドの周辺264m²について本調査を実施した。本調査範囲から石器集中地点が2ヶ所検出された。

平成17年度は南側の1,670m²を調査した。上層の確認調査はトレンチ方式により実施し、縄文時代の土坑が5基検出された。トレンチ周辺を拡張して同類の土坑が存在するか確認したが、結局検出されず、確認調



第1図 グリッド呼称図 (1/40)



第2図 雷遺跡、トレント・グリッド設定、遺構分布図（1/2,000）

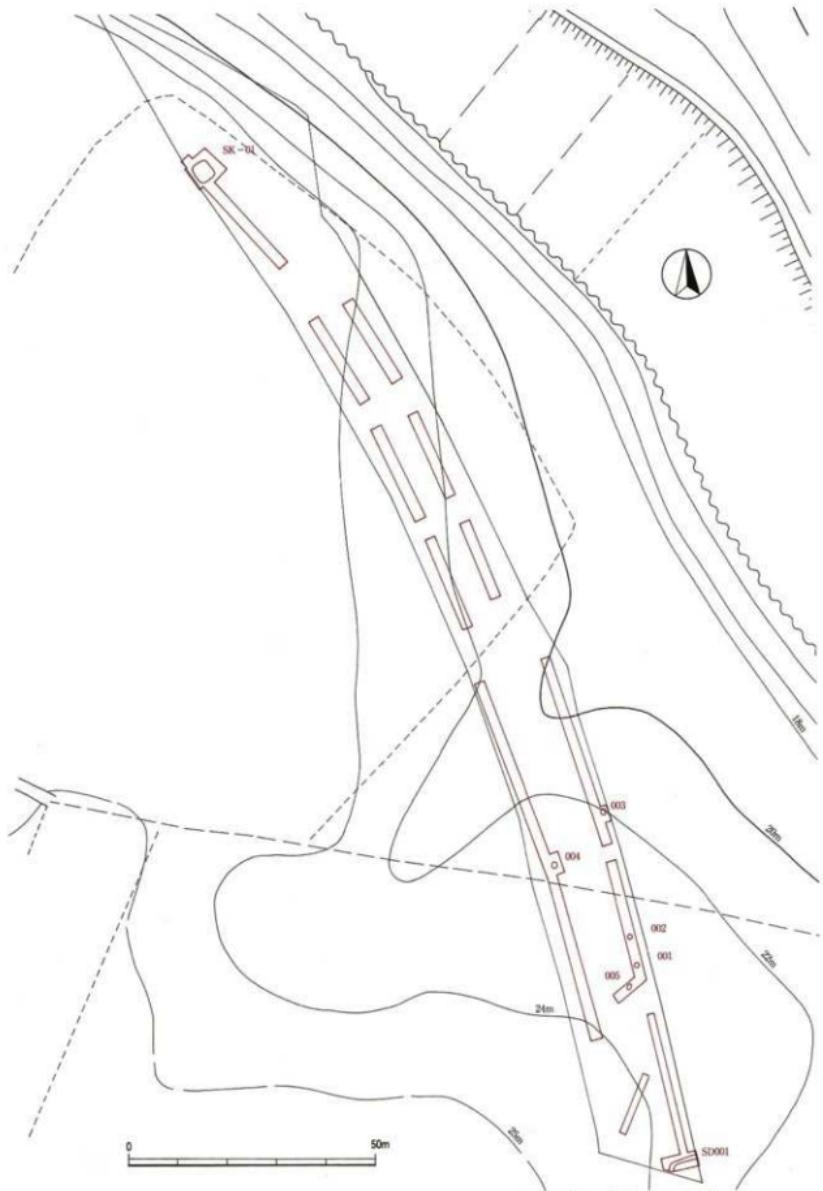
査で終了した。

下層の確認調査は、グリッド方式で約4%実施した。調査区南東の1か所のグリッドから旧石器時代の石器が検出された。石器の出土したグリッドの周辺165mについて本調査を実施した。本調査範囲から石器集中地点が1か所検出された。

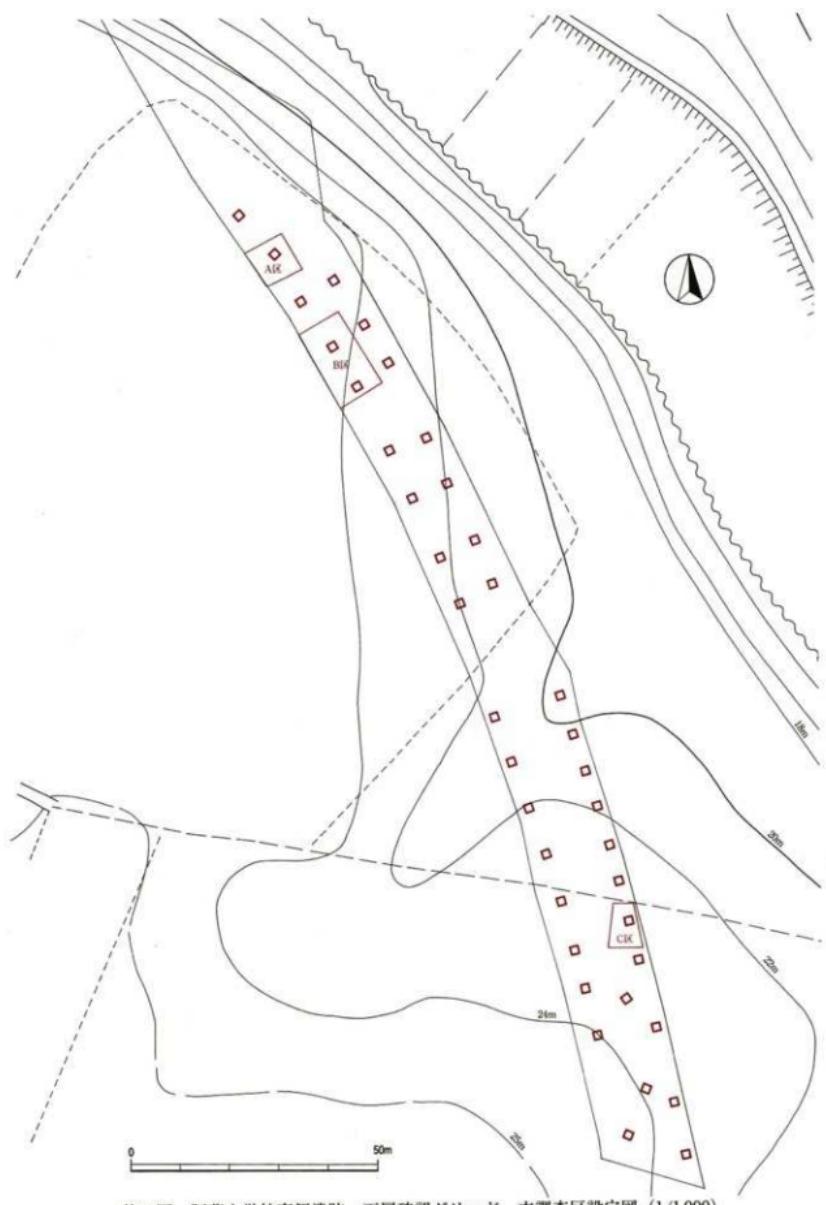
平成18年度は南端部分の429m²を調査した。上層についてはトレント方式で、下層についてはグリッド方式で確認調査を実施した。確認調査で上層のトレントから弥生時代の溝1条が検出された。出土遺物と



第3図 阿蘇中学校東側遺跡、グリッド設定図 (1/2,000)



第4図 阿蘇中学校東側遺跡、上層確認トレンチ設定、遺構分布図 (1/1,000)



第5図 阿蘇中学校東側遺跡、下層確認グリッド、本調査区設定図 (1/1,000)

して数点の縄文土器片が出土した。下層の確認調査で石器は検出されず、上層、下層とともに確認調査で終了した。

第2節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

八千代市は千葉県北西部に位置する。向境遺跡、雷遺跡、阿蘇中学校東側遺跡は、八千代市の米本集落のある標高約24mの台地に所在する。西印旛沼の西端から流れ出た新川が、東から反時計回りに円を描いてこの台地の周囲をめぐり、南方角へ東京湾に向かっている。向境遺跡、雷遺跡、阿蘇中学校東側遺跡は、この台地の中央付近に位置し、周辺は新川に流れ込む多くの支流によって樹枝状に開析されている。

県道千葉竜ヶ崎線は、米本集落のある台地のほぼ中央を南北に通っている。この県道が国道16号線と合流する付近に、内宿、上宿、下宿と呼称される古い集落がある。近年この地点で交通量が増え、しばしば渋滞が発生することから、内宿、上宿、下宿の集落を迂回して南北に通るバイパス道路が造られることとなった。今回の調査は、このバイパス道路建設にともなう発掘調査であった。

2 歴史的環境

印旛沼は、人間や動植物の繁栄に欠かせない重要な水源を、太古から提供してきた。印旛沼周辺には、人間の生活痕跡が数多く残っていて、考古学的な遺跡となって分布している。今回調査した阿蘇中学校東側遺跡の所在する米本集落の台地を中心に、周辺遺跡の状況を見てみよう。

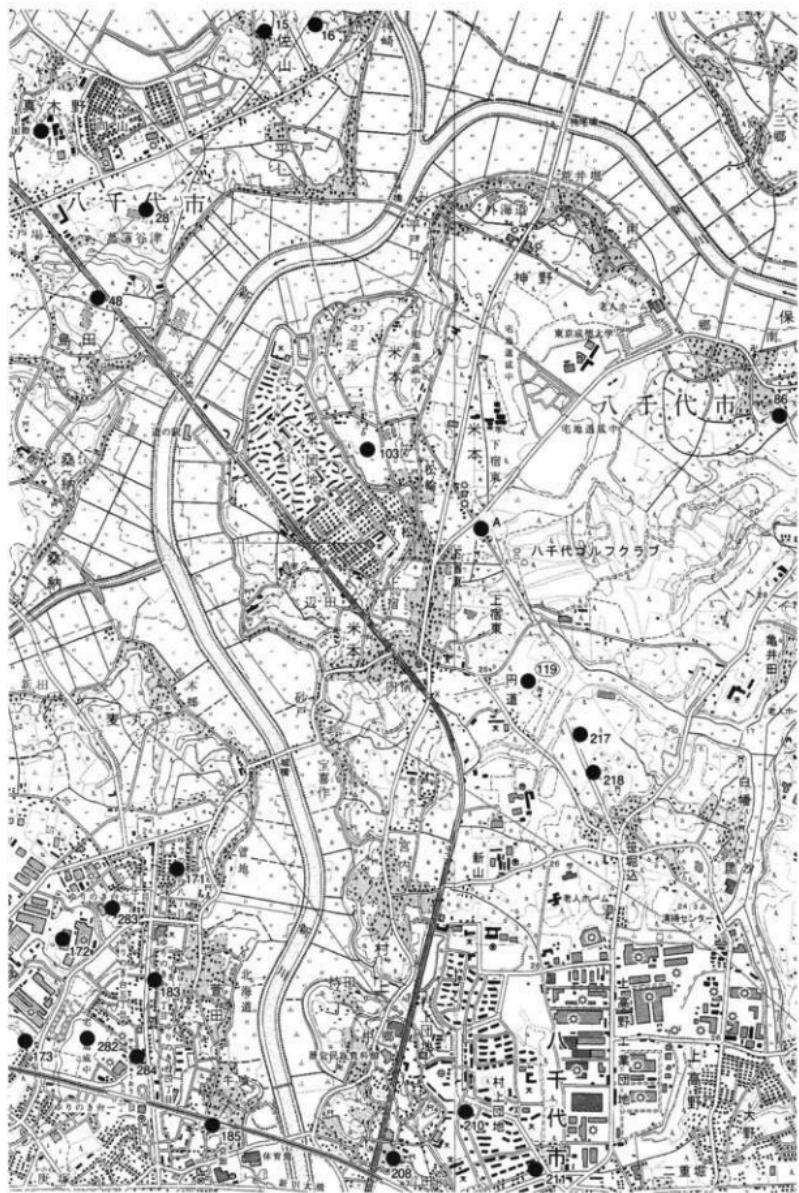
IH石器時代の遺跡として（第6図）、今回調査した阿蘇中学校東側遺跡（119）の他に、南東側に小支谷をはさんで平沢遺跡（217）がある（第1表）³³⁾。さらに平沢遺跡の南東に隣接して殿台遺跡（218）がある。阿蘇中学校東側遺跡、平沢遺跡、殿台遺跡が台地中央で群を成して遺跡がまとまっている。阿蘇中学校東側遺跡から北約0.8kmに雷南遺跡（A）、北西約1.5kmに大山遺跡（103）が、また北東約2kmの台地縁辺におおびた遺跡（86）がそれぞれ位置する。大山遺跡、おおびた遺跡はそれぞれ孤立した遺跡である。

新川をはさんで北西の台地上に旧石器時代の松原遺跡（11）、間見穴遺跡（28）、鳥山込の内遺跡（48）、新久遺跡（15）、子の神台遺跡（16）があり、遺跡群を構成している。

阿蘇中学校東側遺跡の南側約2kmに村上団地があり、その周辺に位置する村上込ノ内遺跡（210）、白筋遺跡（208）、村上第1塚群（211）から旧石器時代の石器が出土し、遺跡群を構成している。

第1表 旧石器時代遺跡一覧表

11	松原遺跡	171	椎現後遺跡	211	村上第1塚群
15	新久遺跡	172	ヲサル山南遺跡	217	平沢遺跡
16	子の神台遺跡	173	向山遺跡	218	殿台遺跡
28	間見穴遺跡	183	北海道遺跡	282	坊山遺跡
48	鳥山込の内遺跡	185	白筋前遺跡	283	ヲサル山遺跡
86	おおびた遺跡	208	白筋遺跡	284	井戸向遺跡
103	大山遺跡	210	村上込ノ内遺跡	A	雷南遺跡
(119)	阿蘇中学校東側遺跡				



第6図 旧石器時代遺跡分布図 (1/25,000)

村上团地の西側、新川をはさんだ対岸の台地上に旧石器時代の遺跡が分布している。権現後遺跡(171)、ヲサル山遺跡(283)、ヲサル山南遺跡(172)、北海道遺跡(183)、坊山遺跡(282)、向山遺跡(173)、井戸向遺跡(284)、白幡前遺跡(185)が分布している。新川をはさんだ両岸の台地上に、それぞれ旧石器時代の遺跡群が存在する。

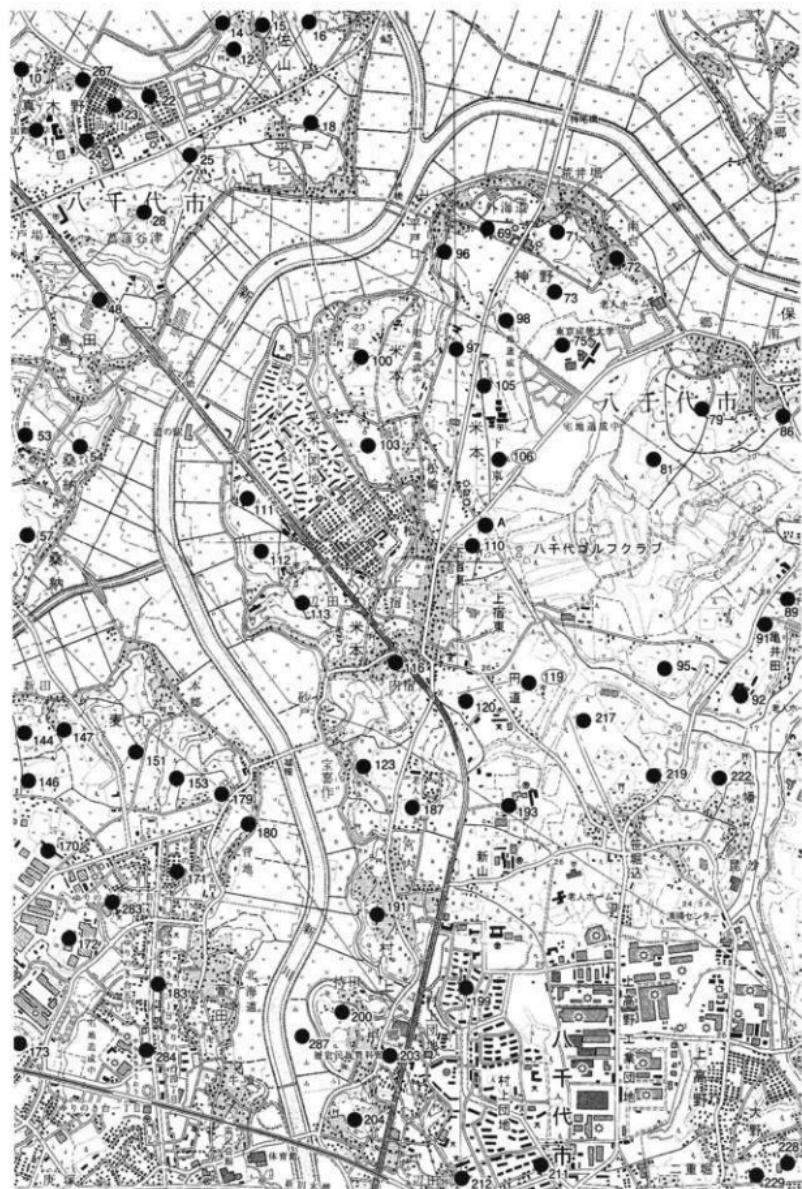
新川流域の旧石器時代の遺跡は、おもに川岸の台地縁辺上に分布している。しかし、阿蘇中学校東側遺跡、平沢遺跡、殿台遺跡からなる遺跡群は、川岸から少し離れた台地中央の小支谷に位置し、川岸の遺跡群とは異なる性格が考えられる。

縄文時代の遺跡は、新川の両岸を中心にして台地上全面に分布する(第7図)。時期的には同一の遺跡から複数の時期の遺物が出土している例が多いが、中期の阿玉台式、後期の加曾利B式の遺跡が多い(第2表)。

今回調査した県道千葉竜ヶ崎線の路線予定地南側約200mの地点に、阿蘇中学校東側遺跡の範囲内に

第2表 縄文時代遺跡一覧表

10 真木野遺跡	91 作畑遺跡	172 ヲサル山南遺跡
11 松原遺跡	92 下高野新山遺跡	173 向山遺跡
12 佐山貝塚	95 丸山遺跡	179 菅地ノ台遺跡
14 西の下遺跡	96 半戸口遺跡	180 菅地ノ台山墳
15 新久遺跡	97 役山遺跡	183 北海道遺跡
16 子の神台遺跡	98 向境遺跡	187 村上奈機遺跡
18 道地遺跡	100 逆水遺跡	191 村上宮内遺跡
22 佐山台遺跡	103 大山遺跡	193 村上新山遺跡
23 真木野向山遺跡	105 役山東遺跡	199 村上向原遺跡
24 東山久保遺跡	106 雷遺跡	200 持田遺跡
25 平戸台遺跡	110 上宿東遺跡	203 殿内遺跡
28 開見穴遺跡	111 青柳台遺跡	204 浅間内遺跡
48 島田込の内遺跡	112 蝶池台遺跡	211 村上第1塚群
53 桑納前畠遺跡	113 米本迎田台遺跡	212 村上第2塚群
54 化輪台遺跡	116 天神輪遺跡	217 平沢遺跡
57 桑納遺跡	119 阿蘇中学校東側遺跡	219 堂の上遺跡
69 神野遺跡	120 赤作遺跡	222 上高野白幡遺跡
71 神野貝塚	123 立野台遺跡	228 上谷津遺跡
72 南台遺跡	144 新田遺跡	229 上谷津台南遺跡
73 境掘遺跡	146 新田台遺跡	267 瓜ヶ作遺跡
75 栗谷遺跡	147 水神遺跡	283 ヲサル山遺跡
79 鰐遺跡	151 麦丸遺跡	284 井戸向遺跡
81 保品廣塚	153 麦丸宮前上遺跡	287 浅間下遺跡
86 おおびた遺跡	170 麦丸台塚群	A 雷南遺跡
89 天神遺跡	171 権現後遺跡	



第7図 繩文時代遺跡分布図 (1/25,000)

八千代中央墓園があり、その敷地内で昭和54年、昭和56年、昭和58年に調査が実施された。八千代中央墓園の調査では、縄文時代の遺構として中期の埋甕、焼甕が検出され、縄文土器片が出土した。

阿蘇中学校東側遺跡の東側に東西にのびる小支谷があり、小支谷の両側に縄文時代の遺跡が分布している。南側に平沢遺跡（217）、堂の上遺跡（219）、上高野白幡遺跡（222）、北側に丸山遺跡（95）、下高野新山遺跡（92）が位置している。これらの遺跡のうち、下高野新山遺跡が昭和61年、昭和63年、平成元年、平成6年に調査された。縄文時代の遺構として早期の炉穴、住居跡、ピットが検出された⁴⁾。

阿蘇中学校東側遺跡の西側には赤作遺跡（120）、大神輪遺跡（116）がある。赤作遺跡については、平成9年の調査で縄文時代中・後期と考えられる上坑が検出された⁵⁾。北側に位置する雷南遺跡（A）からは窯穴が検出された。

弥生時代の遺跡は、新川流域の川岸に近い台地上に多く分布している（第8図）。縄文時代の遺跡分布では、台地全面に遺跡の分布が見られたが、弥生時代の遺跡は川岸の近くに多く分布し、縄文時代ほど台地内部にまで遺跡の分布は濃密ではなかった。調査された弥生遺跡には弥生時代後期のものが多く、中期の遺跡は少なかった。

米本集落のある台地北端と、新川をはさんだ北西の対岸台地上に弥生時代の遺跡が分布している。米本集落のある台地北端には神野遺跡（69）があり、周辺に半戸口遺跡（96）、境振遺跡（73）、向境遺跡（98）、役山東遺跡（105）、栗谷遺跡（75）、雷遺跡（106）、上谷遺跡（77）、雷南遺跡（A）が群を成している（第3表）。その西側に約0.5km離れた地点に逆水遺跡（100）と大山遺跡（103）がある。

新川をはさんだ北西の対岸台地先端部には道地遺跡（18）があり、周辺に間見穴遺跡（28）、東山久保遺跡（24）、松原遺跡（11）、瓜ヶ作遺跡（267）、佐山台遺跡（22）、田原塙遺跡（269）、佐山貝塚（12）、新久遺跡（15）、子の神台遺跡（16）がある。台地先端部分で弥生遺跡が群を成して分布している。

米本集落のある台地の北東端に保品南遺跡（84）、おおびた遺跡（86）がある。この2遺跡はやや孤立した遺跡群である。

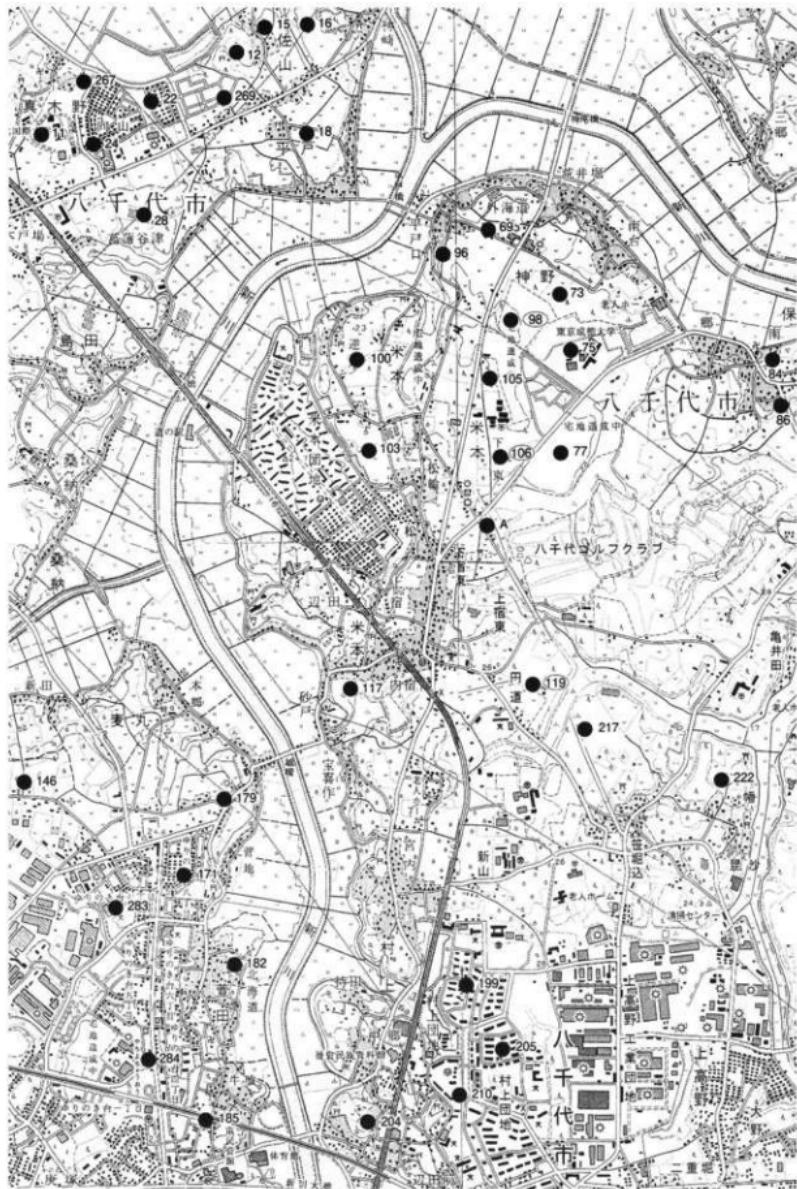
米本集落の南側約3kmの地点に村上団地があり、付近の弥生時代遺跡として村上込ノ内遺跡（210）、名主山遺跡（205）、村上向原遺跡（199）がある。さらに西側に新川をのぞむ台地縁辺上に浅間内遺跡（204）が位置する。

新川をはさんで村上団地の西側対岸台地上に、弥生時代の遺跡が分布している。台地縁辺の北から南へ晩地ノ台遺跡（179）、椎現後遺跡（171）、ラサル山遺跡（283）、南海道遺跡（182）、井戸向遺跡（281）、白幡前遺跡（185）が位置している。

阿蘇中学校東側遺跡（119）の周辺に位置する弥生時代の遺跡として、小支谷をはさんだ東側の台地上に平沢遺跡（217）がある。弥生時代の遺跡は、米本集落の北側で新川をはさんだ両側の台地、および南側の村上団地周辺の新川をはさんだ両側の2地点に多く分布し、その中間にはさほど分布していない。阿蘇中学校東側遺跡と平沢遺跡は台地内部でやや孤立した状況である。

古墳時代の遺跡は、米本集落のある台地の縁辺に多く分布している（第9図）。古墳時代の遺跡分布状況は、弥生時代の遺跡分布とやや似た状況である。新川をのぞむ流域沿岸の台地上に古墳時代の遺跡が多く分布し、台地内部に古墳時代の遺跡はさほど分布していない。

米本集落の北側に逆水遺跡（100）があり（第4表）、新川をはさんだ北西対岸には道地遺跡（18）、平戸台古墳群（19）、間見穴古墳群（27）、間見穴遺跡（28）、鳥田辺の内遺跡（48）がある。さらに台地先



第8図 弁生時代遺跡分布図 (1/25,000)

第3表 弥生時代遺跡一覧表

11	松原遺跡	86	おびた遺跡	185	白幡前遺跡
12	佐山貝塚	96	平戸口遺跡	199	村上向原遺跡
15	新久遺跡	98	向境遺跡	204	浅間内遺跡
16	子の神台遺跡	100	逆水遺跡	205	名土山遺跡
18	道地遺跡	103	大山遺跡	210	村上込ノ内遺跡
22	佐山台遺跡	105	役山東遺跡	217	平沢遺跡
24	東山久保遺跡	106	雷遺跡	222	上高野白幡遺跡
28	間見穴遺跡	117	米本城跡	267	瓜ヶ作遺跡
69	神野遺跡	119	阿蘇中学校東側遺跡	269	田原窟遺跡
73	境掘遺跡	146	新田台遺跡	283	ヲサル山遺跡
75	栗谷遺跡	171	権現後遺跡	284	井戸向遺跡
77	上谷遺跡	179	菅地ノ台遺跡	A	雷南遺跡
84	保品南遺跡	182	南海道遺跡		

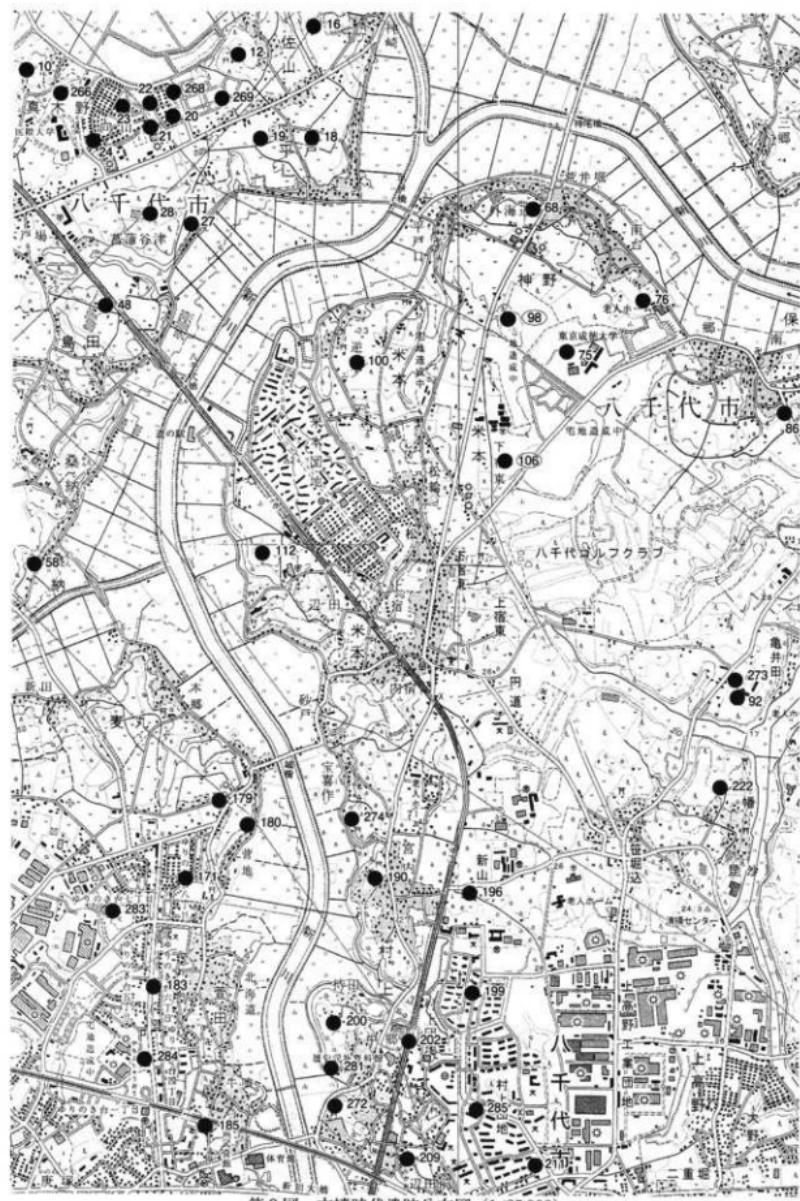
端部の北側には真木野古墳（20）、佐山台古墳（21）をはじめ、古墳時代の遺跡が多数分布している。

米本集落の北東側には栗谷遺跡（75）、向境遺跡（98）、雷遺跡（106）がある。

米本集落の南側、村上団地周辺には七百余所神社古墳（190）、西山遺跡（196）、村上向原遺跡（199）、境作遺跡（202）、持田遺跡（200）、正覚院塚（281）、浅間内古墳（272）、村上第1号古墳（285）、根上神

第4表 古墳時代遺跡一覧表

10	真木野遺跡	76	保品栗谷古墳	200	持田遺跡
12	佐山貝塚	86	おびた遺跡	202	境作遺跡
16	子の神台遺跡	92	下高野新山遺跡	209	根上神社古墳
18	道地遺跡	98	向境遺跡	211	村上第1塚群
19	平戸口古墳群	100	逆水遺跡	222	上高野白幡遺跡
20	真木野古墳	106	雷遺跡	266	真木野前遺跡
21	佐山台古墳	112	蜻池台遺跡	268	田原窟古墳群
22	佐山台遺跡	171	権現後遺跡	269	田原窟遺跡
23	真木野向山遺跡	179	菅地ノ台遺跡	272	浅間内古墳
24	東山久保遺跡	180	菅地ノ台古墳	273	下高野新山古墳
27	間見穴古墳群	183	北海道遺跡	274	宝喜作台人定塚
28	間見穴遺跡	185	白幡前遺跡	281	正覚院塚
48	島田込の内遺跡	190	七百余所神社古墳	283	ヲサル山遺跡
58	桑納古墳群	196	西山遺跡	284	井戸向遺跡
68	神野芝山古墳群	199	村上向原遺跡	285	村上第1号古墳
75	栗谷遺跡				



第9図 古墳時代遺跡分布図 (1/25,000)

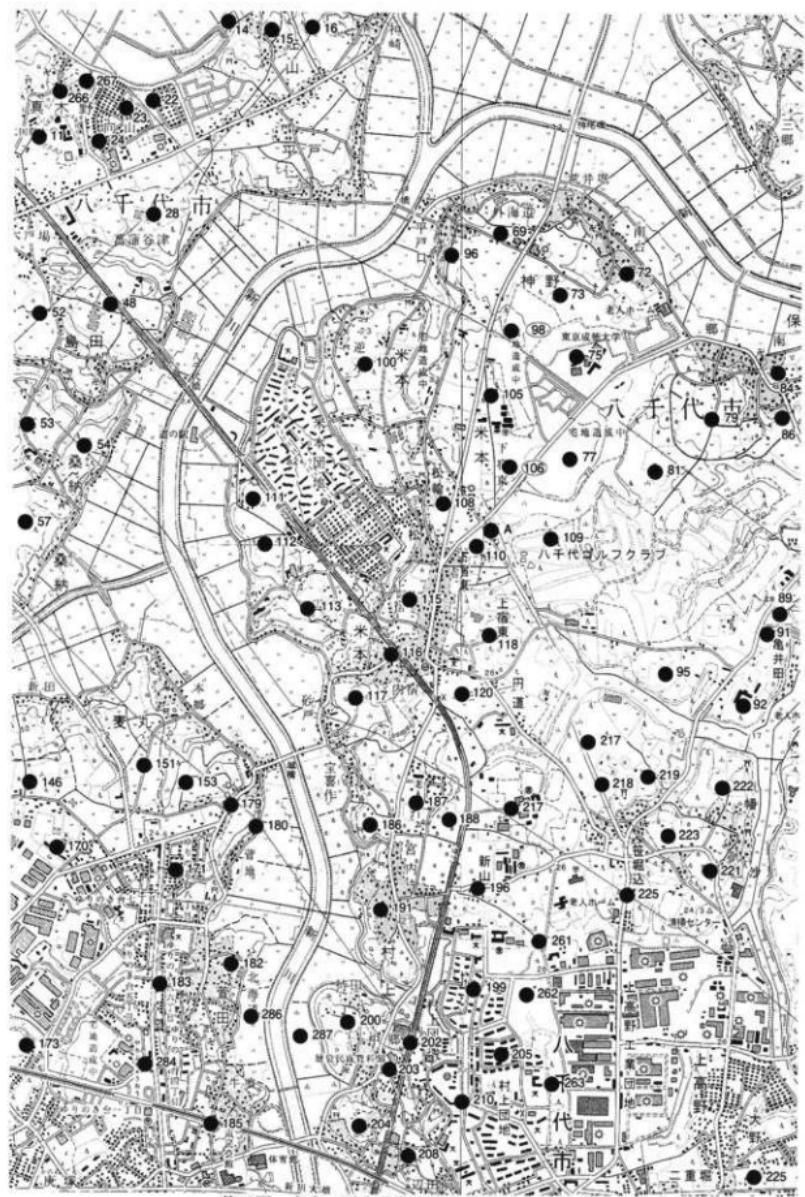
社古墳（209）、村上第1塚群（211）が分布している。新川をはさんだ西側対岸の台地上には菅地ノ台遺跡（179）、菅地ノ台古墳（180）、椎現後遺跡（171）、ヲサル山遺跡（283）、北海道遺跡（183）、井戸向遺跡（284）、白幡前遺跡（185）が分布している。

古墳時代の遺跡は、弥生時代遺跡の分布と同じように、米本集落の北側、および南側の村上団地周辺の新川をはさんだ両側の2地点に多く分布し、その中间にはさほど分布していない。

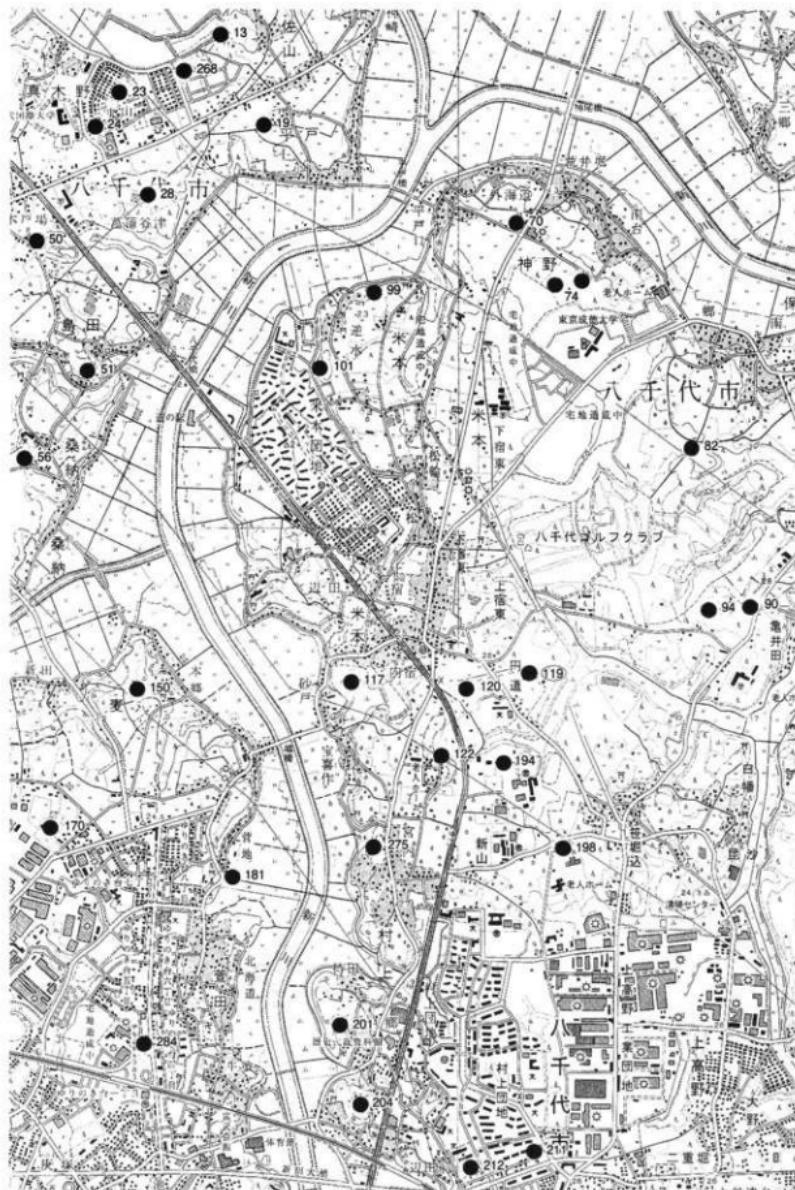
奈良・平安時代の遺跡は、新川をのぞむ台地縁辺だけでなく、台地内部の全面にも広く分布している（第10図）。奈良・平安時代に新川流域で開発が進み、台地上の到る所で集落が形成されたと考えられる（第5表）。

第5表 奈良・平安時代遺跡一覧表

11 松原遺跡	100	連水遺跡	191	村上宮内遺跡
14 西の下遺跡	105	役山東遺跡	193	村上新山遺跡
15 新久遺跡	106	雷遺跡	196	西山遺跡
16 子の神台遺跡	108	下治東遺跡	199	村上向原遺跡
22 佐山台遺跡	109	向削遺跡	200	持田遺跡
23 真木野向山遺跡	110	上宿東遺跡	202	境作遺跡
24 東山久保遺跡	111	青柳台遺跡	203	殿内遺跡
28 間見穴遺跡	112	蛸池台遺跡	204	浅間内遺跡
48 島田込の内遺跡	113	米本辻田台遺跡	205	名主山遺跡
52 島田遺跡	115	上宿西遺跡	208	白筋遺跡
53 桑納前畠遺跡	116	大神輪遺跡	210	村上込ノ内遺跡
54 花輪台遺跡	117	米本城跡	217	平沢遺跡
57 桑納遺跡	118	上宿遺跡	218	殿台遺跡
69 神野遺跡	120	赤作遺跡	219	堂の上遺跡
72 南台遺跡	146	新州台遺跡	222	上高野白幡遺跡
73 境掘遺跡	151	麦丸遺跡	223	磐掘込遺跡
75 栗谷遺跡	153	麦丸宮前上遺跡	224	毘沙遺跡
77 上谷遺跡	170	麦丸台塚群	225	上高野人山遺跡
79 鄭遺跡	171	椎現後遺跡	229	上谷津台南遺跡
81 保品庚塚	173	向山遺跡	261	大塚遺跡
84 保品南遺跡	179	菅地ノ台遺跡	262	大塚南遺跡
86 おびひた遺跡	180	菅地ノ台古墳	263	野路作遺跡
89 天神遺跡	182	南海道遺跡	266	真木野前遺跡
91 作畠遺跡	183	北海道遺跡	267	瓜ヶ作遺跡
92 下高野新山遺跡	185	白幡前遺跡	284	井戸向遺跡
95 丸山遺跡	186	宝喜作台遺跡	286	志津根遺跡
96 平戸口遺跡	187	村上奈機遺跡	287	浅間下遺跡
98 向境遺跡	188	村上新山西遺跡	A	吉南遺跡



第10図 奈良・平安時代遺跡分布図 (1/25,000)



第11図 中近世遺跡分布図 (1/25,000)

代表的な奈良・平安時代の遺跡として、村上団地周辺の村上込ノ内遺跡（210）と、新川をはさんで西側対岸の台地上に分布する権現後遺跡（171）、北海道遺跡（183）、井戸向遺跡（284）、白幡前遺跡（185）などの豈田遺跡群があげられる。村上込ノ内遺跡および豈田遺跡群からは大量の墨書き土器が出土した。権現後遺跡から「村神郷丈部國依甘魚」銘の墨書き土器が出土し、権現後遺跡周辺は「和妙類聚抄」に記された「印旛郡村神郷」に比定された。

阿蘇中学校東側遺跡の北側約1kmに上谷遺跡（77）が位置する。近年、宅地造成工事にともない83,900m²が発掘調査された。台地全面にわたる広い範囲から、縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代の住居跡および掘立柱建物跡が検出された。特に奈良・平安時代の墨書き土器の出土が著しく、I地区から65点、II地区から410点、III地区から127点、IV地区から143点、V地区から210点、総計1,000点弱出土した⁶⁾。

八千代市で出土した墨書き土器の点数は2,000点を越え、千葉県全体の推定総点数の約1割を占めると言われ、古代に八千代市の領域が政治文化的に重要な場所であったと考えられている。その八千代市の中でも、村上込ノ内遺跡と豈田遺跡群、上谷遺跡からは大量の墨書き土器が出土した。奈良・平安時代に拠点的集落が新川流域に営まれ、新川は重要な物流手段を提供したのであろう。

中近世の遺跡は、新川流域の台地縁辺に、さほど密集せずに散在し（第11図）、ほとんどの遺跡は近世の塚であった（第6表）。中世の城館跡としては、島田城跡（51）、米本城跡（117）、飯綱砦跡（181）、正覚院館跡（201）があり、これらの城館は新川両岸で、東西交互に相対峙するかのように形成された。近世の塚は、その多くが集落からやや離れた地点に造られている。

阿蘇中学校東側遺跡（119）では、昭和58年の八千代市の調査、および平成10年の千葉県文化財センターの調査で、中近世の土坑群が検出された。これらの土坑群に遺物はともなっていなかったが、土坑墓と判断された。また、阿蘇中学校東側遺跡の西側約300mに位置する赤作遺跡（120）からも中近世の溝、土坑墓群が検出され、陶器片が出土した⁷⁾。赤作遺跡は、米本城跡および近世の集落に近接し、その関連性がうかがえる。

第6表 中近世遺跡一覧表

13	佐山塚群	90	作畑塚群	181	飯綱砦跡遺跡
19	平戸台古墳群	94	大久保三山塚	194	村上新山塚群
23	真木野向山遺跡	99	逆水北塚群	198	上高野相野庚申塚
24	東山久保遺跡	101	逆水塚群	201	正覚院館跡
28	間見穴遺跡	117	米本城跡	204	浅間内遺跡
50	島田塚群	(119)	阿蘇中学校東側遺跡	211	村上第1塚群
51	島田城跡	120	赤作遺跡	212	村上第2塚群
56	熊野神社群集塚	122	米本塚	268	田原森古墳群
70	神野新山塚群	150	人日前塚群	275	七百余所神社塚
74	神野群集塚	170	麦丸台塚群	284	井戸向遺跡
82	間谷塚群	—	—	—	—

3 周辺遺跡の調査

向境遺跡は、米本集落のある台地のやや北側に位置する。遺跡の南東側には新川に流入する小支谷があり、周囲に神野芝山遺跡、平戸口遺跡、役山遺跡、役山東遺跡がある。小支谷を挟んだ南東の台地上には栗谷遺跡がある。向境遺跡は周辺の遺跡とともに遺跡群を構成している。平成9年度と平成11年度に調査した部分は、向境遺跡西端のきわめて狭い範囲であった（第12図）。

大規模な宅地造成工事により、向境遺跡をはじめ周囲の遺跡が八千代市遺跡調査会によって調査された⁽⁸⁾。向境遺跡からは縄文時代の炉穴、土坑、弥生時代の住居跡、古墳時代の住居跡、奈良・平安時代の住



第12図 向境遺跡・雷遺跡周辺の遺跡（1/10,000）

居跡、掘立柱建物跡、土坑が検出された。向境遺跡の北東に位置する境堀遺跡からは縄文時代の住居跡、炉穴、土坑、弥生時代および古墳時代に相当する住居跡、奈良・平安時代の住居跡、掘立柱建物跡、土坑、中世の塚、土壘などが検出された。向境遺跡の南に役山東遺跡が位置し、その東側が部分的に調査された。縄文時代の炉穴、土坑、弥生時代の住居跡、奈良・平安時代の住居跡、土坑などが検出された。

小支谷を挟んで向境遺跡の南東に位置する栗谷遺跡からは、縄文時代の住居跡、炉穴、土坑、弥生時代の住居跡、方形周溝墓、土坑、古墳時代の住居跡、奈良・平安時代の住居跡、掘立柱建物跡などが検出された。

雷遺跡は、役山東遺跡の南側に位置し、向境遺跡から約500m南にある。平成9年度と平成11年度に調査した部分は、遺跡の西南部を西北から東南に走る細長い道路予定地であった。遺跡南東の一部分が八千代市遺跡調査会によって調査され、弥生時代の住居跡、古墳時代の住居跡、奈良・平安時代の住居跡が検出された。

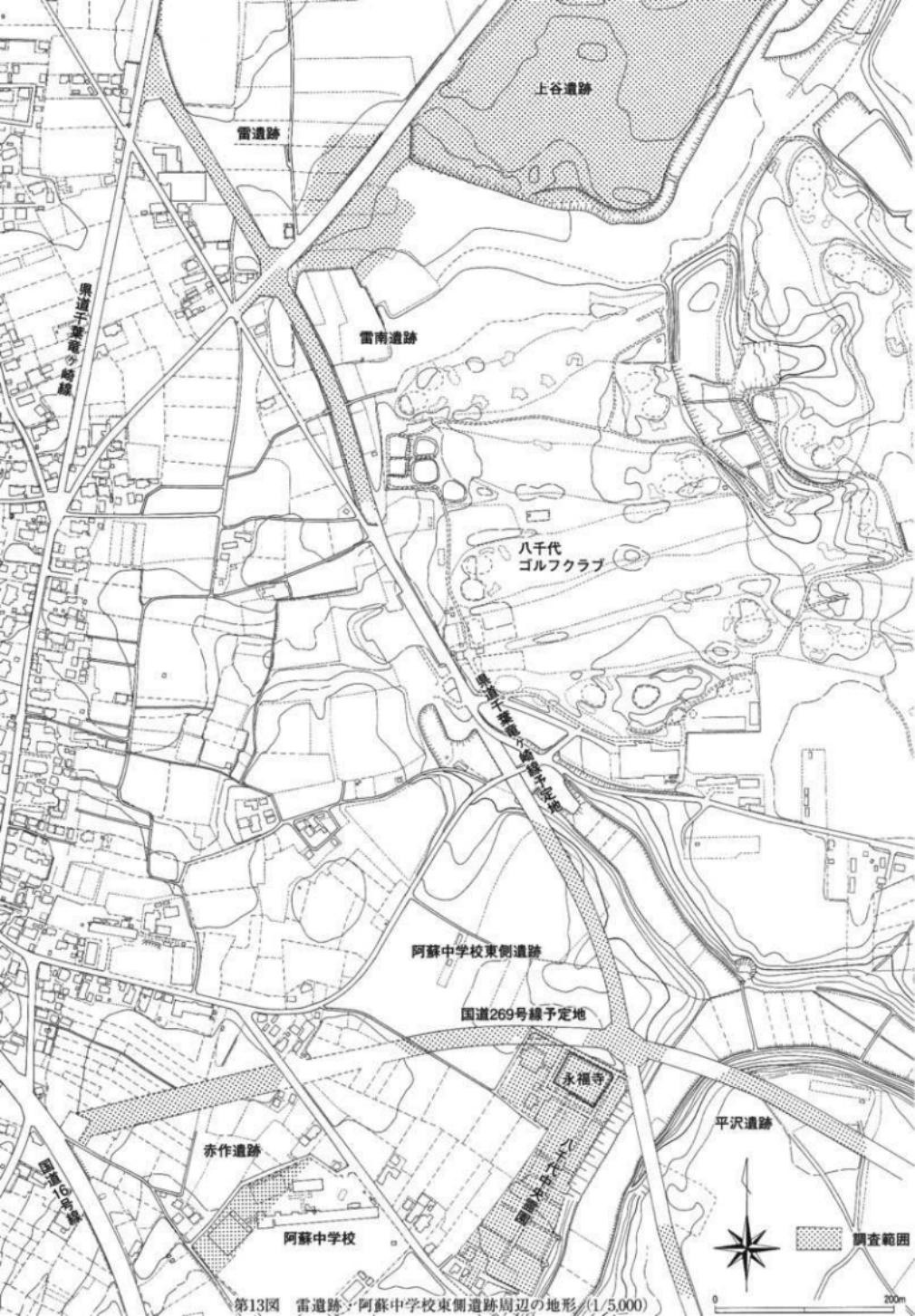
雷遺跡の南側には雷南遺跡が隣接している。県道千葉竜ヶ崎線は、雷遺跡から雷南遺跡を走る予定で、平成11年度に行なわれた雷遺跡の道路予定地の調査とは同時期に、雷南遺跡の道路予定地でも千葉県文化財センターによって調査が実施された。また、道路に隣接して宅地が造成され、八千代市遺跡調査会によって雷南遺跡の調査が行なわれた。これらの調査から、旧石器時代の石器集中地點、縄文時代の炉穴、土坑、窓穴、弥生時代および古墳時代の住居跡、奈良・平安時代の住居跡、掘立柱建物跡などが検出された。

雷遺跡の東側に上谷遺跡が接している。上谷遺跡からは、縄文時代の住居跡、炉穴、土坑、弥生時代の住居跡、方形周溝墓、古墳時代の住居跡、奈良・平安時代の住居跡、掘立柱建物跡など多数の遺構、遺物が検出された。境堀遺跡から雷南遺跡にかけて複数の遺跡が大きな群を形成し、多数の遺構が検出された。今回報告する向境遺跡、雷遺跡の調査した部分は、この大規模遺跡群の中のごく一部に過ぎない。

阿蘇中学校東側遺跡の所在する台地の東側と南側に小支谷がめぐり、台地南東側には八千代中央公園・永福寺がある(第13図、図版1)。この零園を造成する時も、同じ阿蘇中学校東側遺跡として発掘調査さ

第7表 阿蘇中学校東側遺跡周辺の遺跡調査

開発事業	遺跡名	調査年	発掘調査機関	調査面積(m ²)
八千代中央公園	阿蘇中学校東側遺跡Ⅰ	1979	八千代市遺跡調査会	5,404
八千代中央公園	阿蘇中学校東側遺跡Ⅱ	1981	八千代市遺跡調査会	4,000
阿蘇中学校	赤作遺跡	1981	八千代市遺跡調査会	1,140
八千代中央公園	阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ	1983	八千代市遺跡調査会	12,000
県道千葉竜ヶ崎線	平沢遺跡	1995	八千代市遺跡調査会	1,250
国道296号線	赤作遺跡	1997	千葉県文化財センター	6,482
国道296号線	阿蘇中学校東側遺跡	1998	千葉県文化財センター	5,132
国道296号線	平沢遺跡	2003	千葉県文化財センター	1,068
県道千葉竜ヶ崎線	阿蘇中学校東側遺跡	2004	千葉県文化財センター	2,495
県道千葉竜ヶ崎線	阿蘇中学校東側遺跡	2005	千葉県教育振興財團	1,670
国道296号線	平沢遺跡	2005	千葉県教育振興財團	3,492
県道千葉竜ヶ崎線	阿蘇中学校東側遺跡	2006	千葉県教育振興財團	429
国道296号線	阿蘇中学校東側遺跡	2006	千葉県教育振興財團	1,142



第13図 雷遺跡・阿蘇中学校東側遺跡周辺の地形 (1/5,000)

れた。また雲岡の北側を国道296号線が通る道路改築工事の時にも、発掘調査が実施された。阿蘇中学校東側遺跡の周辺では、今までに発掘調査が約10回実施され（第7表）、台地上の考古学的様相が判明している。これまでの調査で得られた成果の概略をまとめておく。

まず、阿蘇中学校の東側にある八千代中央雲園・永福寺の造営にあたり、昭和54年に発掘調査が実施された。調査の成果として弥生時代の住居跡9軒、方形周溝墓1基、土坑2基が明らかとなった¹⁰⁾。

その後この雲園は、隣接して拡張されることとなり、昭和56年に第Ⅱ次調査、昭和58年に第Ⅲ次調査が実施された。第Ⅲ次の調査成果は、縄文時代の埋甕1基、弥生時代の住居跡10軒、方形周溝墓1基、炉址3基、土坑35基が検出された¹¹⁾。

雲園造成とともにう3回の発掘調査で、おもに弥生時代の住居と墓からなる集落が、台地上に営まれていたことが判明した。さらに台地の他の部分までにも、集落が広がっていると予測された。

八千代中央雲園・永福寺は台地縁辺に位置するが、小支谷をはさんだ隣の東側台地縁辺を南北に、県道千葉竜ヶ崎線が建設されることとなった。この台地に平沢遺跡が所在することが事前にわかつていたため、道路を建設する前、平成7年に八千代市が発掘を実施した。この調査で、弥生時代の住居跡が10軒検出された¹²⁾。すなわち、小支谷をはさんだ両側の台地上に、それぞれ弥生時代の集落が営まれていたことが判明した。

現在の阿蘇中学校をはさんで台地の西側に赤作遺跡、東側に阿蘇中学校東側遺跡が存在する。昭和58年に阿蘇中学校の工事にともない赤作遺跡が発掘された。この調査で中近世の溝が検出され、中世の常滑大甕、瓦質植鉢、近世陶器片が出土した。

阿蘇中学校の北側を東西に走る国道296号線の改築工事が計画され、それにともなう遺跡調査が千葉県文化財センターによって行なわれた。平成9年度に道路予定地西側の赤作遺跡が調査され、旧石器時代から中近世までの遺構・遺物が検出された。主たる遺構・遺物は中近世のもので、溝、道路状遺構、土坑墓群が検出され、中近世の陶磁器、土器、土製品が出土した。

阿蘇中学校の北東部分、八千代中央雲園・永福寺に隣接する道路予定地東側部分が、阿蘇中学校東側遺跡の一部として、平成10年度に千葉県文化財センターによって調査された。この時の調査で、旧石器時代から中近世までの遺構・遺物が少數検出され、調査区中央から中近世の土坑群が検出された¹³⁾。

同じく国道296号線の改築工事で、東側台地の平沢遺跡で、平成15年度に千葉県文化財センターによって調査が実施され、縄文時代の土坑が検出された。翌年の平成16年度から平成18年度にかけて、八千代中央雲園・永福寺北側の台地縁辺部で、県道千葉竜ヶ崎線が通る範囲を、千葉県文化財センター（平成17年9月から千葉県教育振興財團と改称）が調査を行なった。この部分の調査成果が、本書の報告に含まれている（第14図）。

国道296号線の改築工事にともない、平成15年度に統いて平成17年度にも、平沢遺跡が調査され、旧石器時代の石器集中地点が数ヶ所検出された。さらに平成18年度には、県道千葉竜ヶ崎線と国道296号線との交差点となる場所、阿蘇中学校東側遺跡の台地東端部が調査され、旧石器時代の石器集中地点が数ヶ所検出された。



註

- (1) 加藤修司「八千代市向境遺跡」千葉県文化財センター調査報告第346集, 1998年。
- (2) 柳原弘二「主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査報告書」千葉県文化財センター調査報告第359集, 1999年。
- (3) 遺跡分布図と遺跡一覧表の遺跡番号は、「千葉県埋蔵文化財分布地図(1)」千葉県教育委員会, 1997年に準拠した。
- (4) 「市内遺跡群発掘調査報告 昭和63年度」八千代市教育委員会, 1989年。p. 4~6。
「市内遺跡群発掘調査報告 平成元年度」八千代市教育委員会, 1990年。p. 4~5。
「八千代市埋蔵文化財調査年報 平成6年度版」八千代市教育委員会, 1996年。p. 46~7.
- (5) 井上哲朗「一般国道296号道路改築事業埋蔵文化財調査報告書1」千葉県文化財センター調査報告第360集, 1999年。
- (6) 武藤健一他「上谷遺跡」第1~5分冊, 大成建設株式会社, 2001~2005年。
- (7) 井上哲朗, 註(5)。
- (8) 蔡茂美他『栗谷遺跡』第1~2分冊, 大成建設株式会社, 2001~2004年。
宮沢久史『栗谷遺跡・役山東遺跡・雷南遺跡・雷遺跡』大成建設株式会社, 2004年。
武藤健一他, 註(6)。
宮沢久史『向境遺跡』, 大成建設株式会社, 2004年。
宮沢久史『境堀遺跡』, 大成建設株式会社, 2005年。
「シンポジウム『印旛沼周辺の弥生土器』予稿集」シンポジウム『印旛沼周辺の弥生土器』実行委員会, 2006年。
- (9) 佐藤克巳編『阿蘇中学校東側遺跡』八千代市遺跡調査会, 1980年。
- (10) 朝比奈竹男・藤原均編『阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ』八千代市遺跡調査会, 1984年。
- (11) 「八千代市埋蔵文化財調査年報 平成7年度版」八千代市教育委員会, 1997年。p. 12.
- (12) 井上哲朗, 註(5)。

第2章 向境遺跡、雷遺跡

第1節 向境遺跡

県道千葉竜ヶ崎線に関する向境遺跡の調査は、道路沿いに幅約2mの細長い部分について行なわれた。平成7年度は長さ約110mの範囲を調査し、平成11年度はその南側約44mの部分を調査した（第15図）。平成7年度の調査で検出された遺構・遺物は、縄文時代と弥生時代後期の土器片、古墳時代鬼高窓の大型住居跡1軒、溝2条、道路状遺構1条であった。

県道東側の台地上で、平成4年度から平成8年度にかけて八千代市遺跡調査会が、宅地造成にともない合計面積20,000m²以上の発掘調査を行なっていた。八千代市遺跡調査会の調査で、縄文時代の炉穴、弥生時代後期の住居跡、古墳時代の住居跡、奈良・平安時代の住居跡と掘立柱建物跡が検出された。台地上に弥生時代から歴史時代にかけて集落が形成されていたことが判明した。

平成7年度の県道千葉竜ヶ崎線の調査で検出された遺構・遺物は、八千代市遺跡調査会の調査で判明した、弥生時代から奈良・平安時代にかけて形成された集落の一部であった。平成11年度の調査でも、平成7年度の時と同様に、台地上に形成された集落の一部が検出されると予想された。

平成11年度の調査で検出された遺構は溝2条で、出土遺物は縄文土器片と弥生土器片であった。

溝（第16図、図版2）

溝2条のうち、1条は調査区北側で検出されたほぼ南北に走る溝で、幅約1.3m、深さ約0.4mであった。溝底面から小ピットが2か所検出された。もう1条は、道に沿って溝の片側である落ち込み部分が検出され、溝の本体は西側の道路下へ広がっていると考えられる。調査区南側は搅乱されていた。

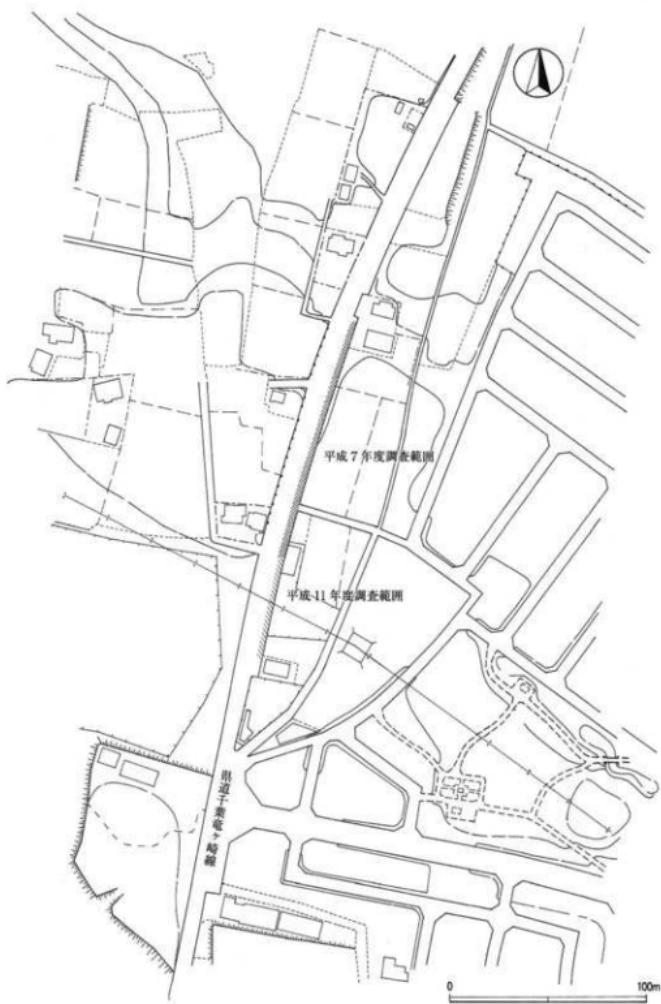
出土遺物（第17図、図版2）

出土遺物は、縄文土器片と弥生土器片で、いずれも小片であった。1は口縁部で内側に渦巻き状の突起が付されていた。胎土に長石粒、細かい白色砂粒、玄母粒を含む。縄文時代中期の阿仁台式の土器片と思われる。2は外面に小突起が付された縄文土器片である。3は器壁の薄い土器片で、縄文が施された弥生時代後期の土器である。

今回の調査は狭い範囲であったために、検出された溝の時代と性格を判断するのは困難であった。周辺の大規模な発掘調査で同様な遺構および出土遺物が検出されているので、それに類似した遺構と考えられる。

第2節 雷遺跡

雷遺跡の西南部を北西から南東へ県道千葉竜ヶ崎線が通ることになり、道路幅約20mが発掘調査の対象となった。平成9年度に雷遺跡を通る道路予定地の北側と南側を調査し、溝1条が検出された。平成11年度に残っていた中間部分を調査した（第2図）。向境遺跡同様に、周辺の宅地造成にともない、八千代市遺跡調査会が雷遺跡およびその南側の雷南遺跡の一部を、平成5年度と平成7年度に調査している。これらの雷遺跡に関する以前の調査で、弥生時代の住居跡、古墳時代後期の住居跡、奈良・平安時代の住居跡



第15図 向境遺跡の周辺図 (1/2,500)

が確認され、弥生時代から歴史時代にかけて集落が形成されていたことが判明した。

平成11年度の調査で検出された遺構は道路状遺構1条で、出土遺物は少量の中世陶器片であった。

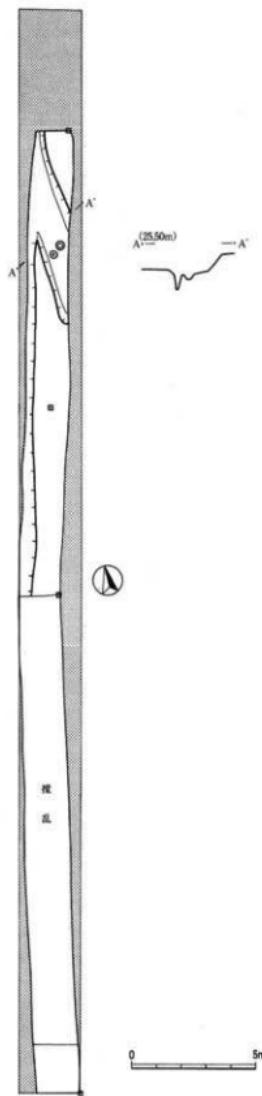
道路状遺構（第18図、図版2）

道路状遺構は東西に走り、幅約2m、深さ約0.7mであった。両脇に小ピットが穿たれていた。底面が硬化していたこと、周囲から中世陶器片が出土したことから、道路状遺構と判断した。

出土遺物については、調査区内から少量の中世陶器片が出土した。しかし、図化できる陶器片はなかった。

平成9年度の調査で、調査区北側で南北に走る溝1条が検出された。出土した遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、近世の瓦質土器などがあった。平成11年度の調査で、東西に走る道路状遺構が検出された。

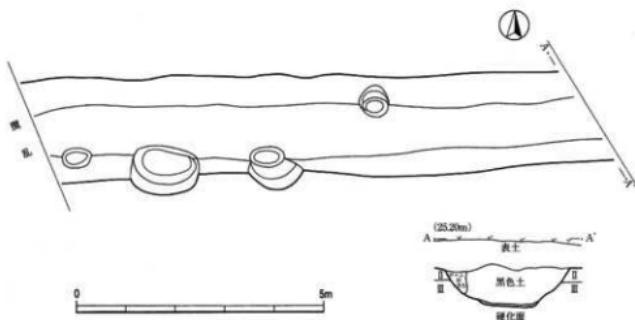
両者の遺構について相互の関連性は不明である。台地全体には弥生時代、古墳時代後期、奈良・平安時代の集落が形成されていたので、それに関連した遺構とも考えられるが、判断したい。



第16図 向境遺跡、溝（1/200）



第17図 向境遺跡出土遺物



第18図 雷遺跡、道路状遺構 (1/100)

第3章 阿蘇中学校東側遺跡

阿蘇中学校東側遺跡の調査は、幅約20mの県道千葉竜ヶ崎線道路予定地内について実施した。台地縁辺にそって道路が走り、平成16年度の調査では道路予定地の長さ約150m、平成17年度の調査ではその南側約80m、平成18年度には南端約10m、合計長さ約240mの調査を実施した。調査範囲の中央やや南側に小さな浅い谷が横切っている。

検出された遺構は、旧石器時代の石器集中地点が3ヶ所、縄文時代の土坑5基、弥生時代の住居跡1軒、溝1条であった。これらの遺構は、さほど密集せずに分布していた。

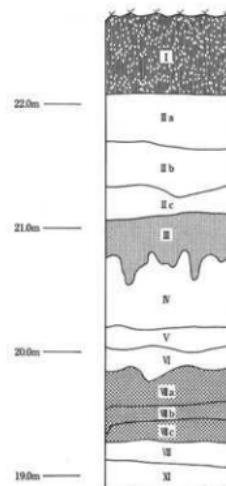
出土した遺物は、旧石器時代の石器、縄文土器、弥生土器であった。

層序区分

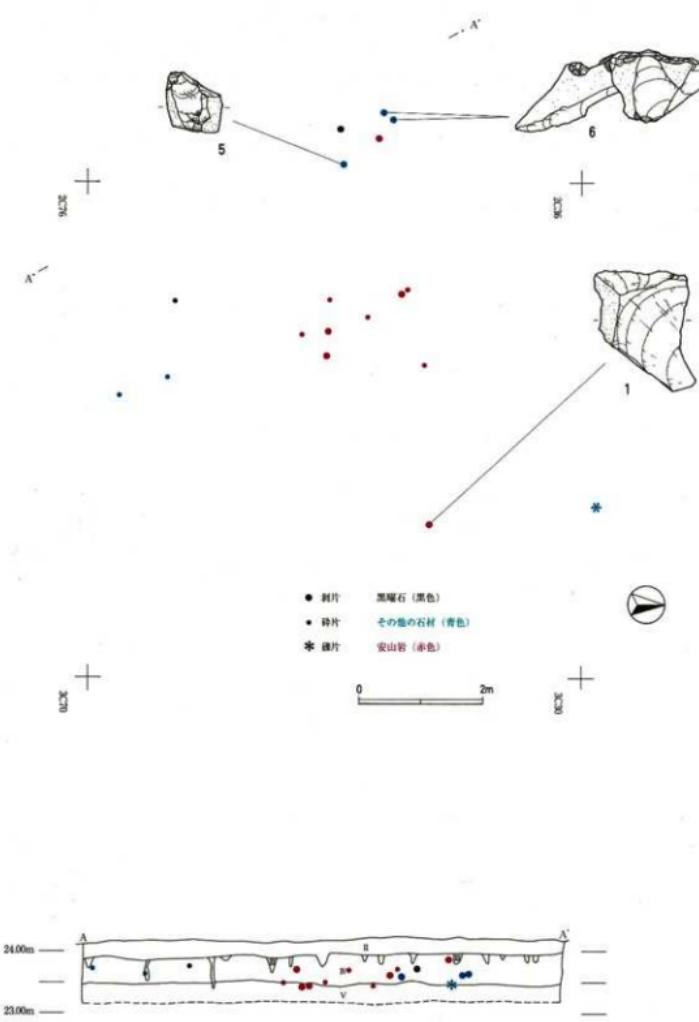
阿蘇中学校東側遺跡は印旛沼周辺の下総台地上に位置する。下総台地は多数の支谷によって開析され、今回調査した地点もそのような支谷に面した開析台地の縁辺であった。調査地点は標高約23mである。遺跡の基本的層序を調査範囲の北側で観察した層序区分にもとづいて記述する。

基本層序

- I 層：表土。ロームを多量に含む。他所から搬入されて置かれた
土である。
II a層：黒色土。漆黒色で、不純物が少ない。
II b層：暗褐色土。暗色のいわゆる「新規テフラ層」である。
II c層：黒色土。微細なローム粒を含む。調査前に付近は山林であつ
たため、腐葉土から変化したII層黒色土が厚く堆積したと
考えられる。
III 層：黄褐色ローム土。いわゆるソフトローム層である。下半は
やや暗色を呈する。IV層、V層にまで切り込んでいない。
IV 層：明黄褐色ローム土。III層ソフトロームの切り込みがさほど
顕著でなく、層序の明瞭な厚い土層であった。
V 層：黄褐色硬質ローム土。第1黒色帯に相当する土層である。
VI 層：明黄褐色硬質ローム土。姶良Tn火山灰を含有している。
木炭粒を含む。
VII a層：暗褐色硬質ローム土。第2黒色帯に相当する土層である。
V層よりも暗色を呈する。
VII b層：暗褐色硬質ローム土。VIIの中間層で、やや暗色を呈する。
VII c層：暗褐色硬質ローム土。VII層中で最も暗色を呈する。
VIII 層：橙褐色ローム土。
IX 層：灰褐色ローム土。武藏野ローム層の最上層に相当する。



第19図 土層柱状図 (1/40)



第20図 A区石器集中地点 (1/80)

第1節 旧石器時代

旧石器時代の石器集中地点が3か所検出された。建設予定の道路は台地縁辺を北西から南東へ、東側に小支谷を見下ろすようにしてのびている。調査は台地縁辺部の道路予定地内で実施され、旧石器時代の石器集中地点が3か所検出された。3か所の石器集中地点を、便宜的に北からA区、B区、C区と命名して記述する（第5図）。A区とB区は調査区北側から、C区は南側から検出された。

A区（第20図、図版3）

A区は調査区北側に位置し、石器の出土総点数は21点であった。石器の分布範囲は1辺約7mの三角形状で、さほど密集していない。出土した層位はおもにIV層で、垂直分布を見ると約0.4mの高低差がある。石器の器種は、剥片と碎片が大半を占める。石器の石材は、安山岩が主体で12点あり、全体の57.1%を占めていた。その他の石材として、珪質頁岩3点、黒曜石2点、黒色頁岩3点、砂岩1点あった（第8表）。おもに安山岩の石器が中心部に分布し、周辺に他の石材の石器が分布していた。

出土遺物（第21・22図、図版6）

このブロックの石器は、砂岩の礫1点をのぞき、残りはすべて剥片・碎片からなり、利器は含まれていなかった。

剥片 1, 2, 3, 5は縦長剥片である。1の横面には原礫面が残る。4は横長剥片で、背面に原礫面が残し置し、刃こぼれ状の微細剥離痕が残る。4は黒色頁岩、5は珪質頁岩で、固化したその他の剥片は安山岩であった。

接合資料 6は、珪質頁岩の剥片 A-013, A-014の接合資料である。上面および背面に原礫面が残る。母岩上面の周縁端に円弧を描くように顕著な打面が形成されていた。A-013が剥離されたのち、同じ方向から連続してA-014が剥離された。剥離後、A-013には逆方向から打撃が加えられている。

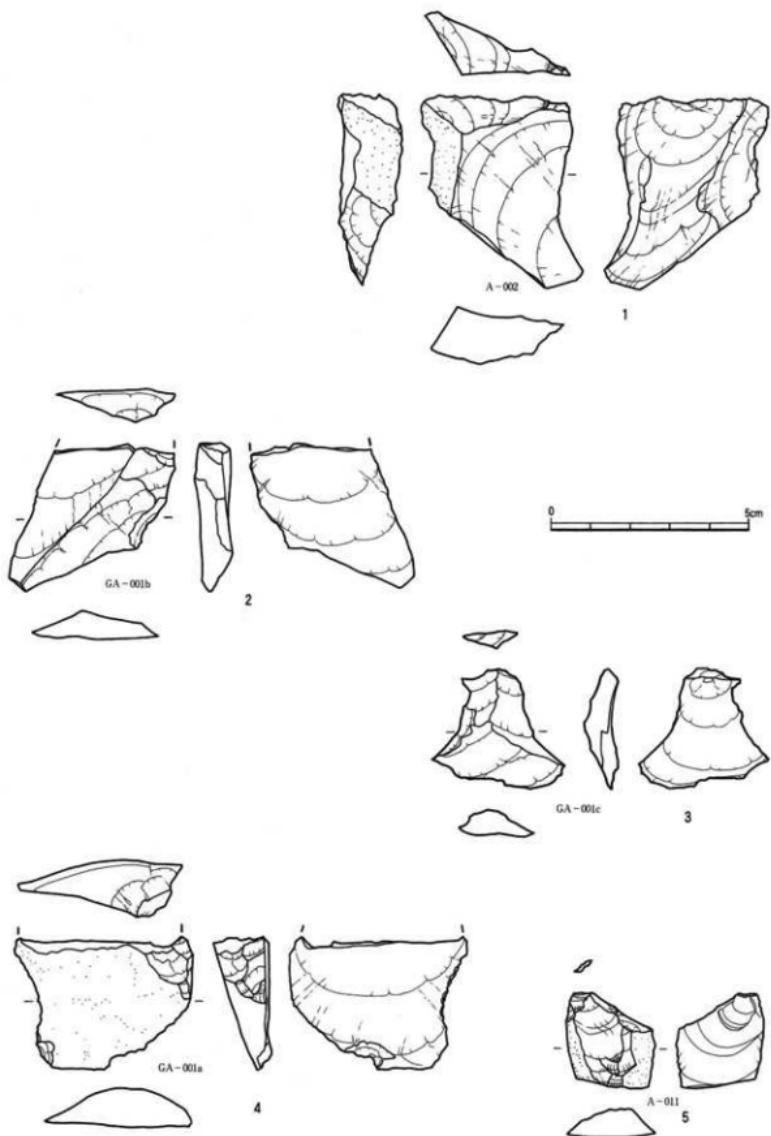
B区（第23図、図版4）

B区は調査区北側、A区の南東約20mに位置する。石器の出土総点数は101点であった。石器の分布範囲は長軸約8m、短軸約5mの指円形状で、南側で比較的多く密集していた。出土した層位はおもにIV層で、垂直分布を見ると約0.6m高低差がある。石器の器種は、ほとんどが剥片と碎片であった。石器の石材は黒曜石が大半を占め、全体の9割以上であった。他の石材はきわめて少量で、珪質頁岩5点、メノウ2点、黒色頁岩1点の石器が含まれていた。

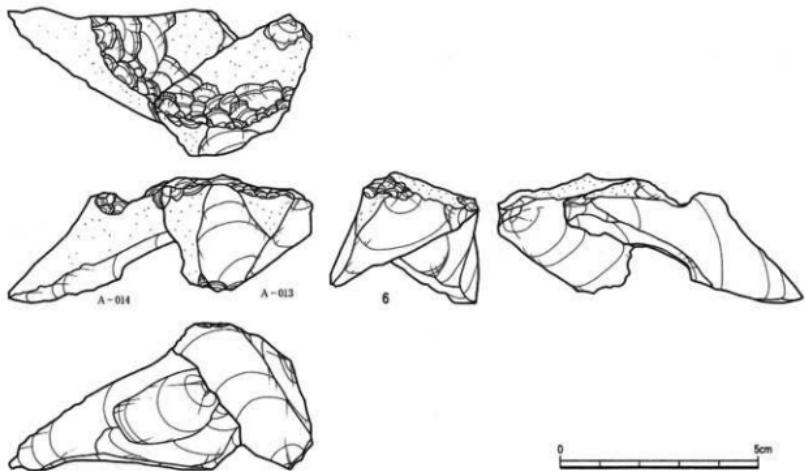
出土遺物（第24～26図、図版7・8）

利器として、ナイフ形石器およびナイフ形石器片3点、使用痕のある剥片2点、石核1点があった。その他は、剥片もしくは碎片であった。

ナイフ形石器 1は、珪質頁岩のナイフ形石器である。縦長剥片を素材としている。素材剥片の打面部を基部にして、右側縁部に平坦調整と微細な加工が見られる。左側刃部の上端が欠損している。2は、折損した黒曜石のナイフ形石器の接合資料である。縦長剥片を素材としている。素材剥片の打面部を基部に、左側縁部に平坦調整と微細な加工を施している。



第21図 A区出土石器（1）



第22図 A区出土石器（2）

使用痕のある剥片 3と4は黒曜石の使用痕のある剥片である。3の背面には原縞面が残る。下端を欠損した縦長剥片の左側縁に微細剥離痕が見られる。4の背面右側縁に刃こぼれ状の微細剥離痕が見られる。

石核 5は珪質頁岩の石核である。上面の打面が平坦な剥離で構成され、正面から右側面へ打点を転移させて縦長剥片の剥離を行なっている。腹面に原縞面が残る。

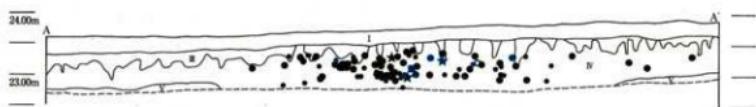
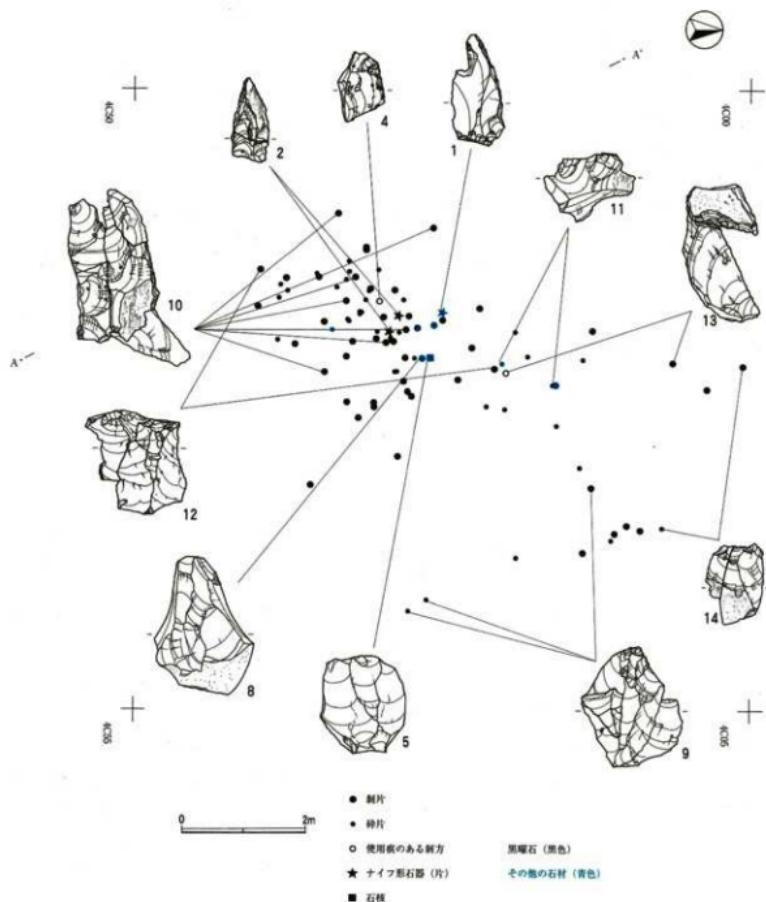
剥片 6～8は珪質頁岩の剥片である。8は焼けて黒色を呈し、背面下部に原縞面が残る。

接合資料 接合資料は11点あり、11を除いてすべて黒曜石であった。9は、連続して剥離された縦長剥片の接合資料である。10は7点の接合資料で、B-076とB-081、B-008とB-020とB-045は、それぞれ縦長剥片で、その剥離後に残ったのがB-046とB-036の石核であった。B-045の背面に原縞面が残る。11はメノウの横長剥片、12と14は黒曜石の縦長剥片の接合資料である。13のB-052は、剥離後に3の使用痕のある剥片となつた石器である。

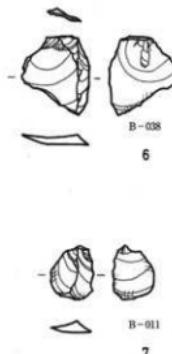
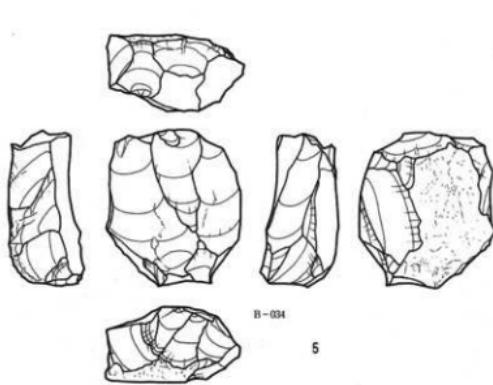
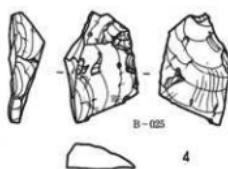
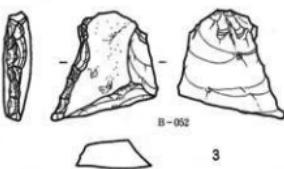
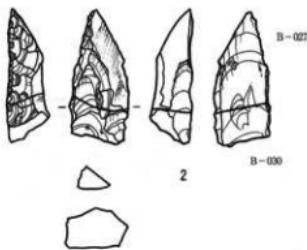
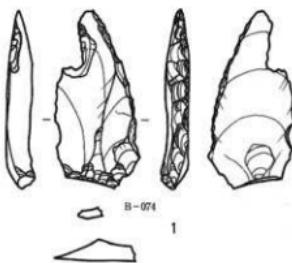
C区（第27図、図版4）

C区は調査区南側に位置する。石器の出土総点数は18点を数える。石器の分布状況は長軸約6m、短軸約4mの楕円形状であった。出土層位は、Ⅲ層上面の、黒色土層とソフトロームの交わる付近で、垂直分布を見ると約0.1m高低差がある。石器の器種は、縞・縞片が多数を占める。石器の石材は、砂岩が主体で、全体の6割以上を占めていた。その他の石材として、凝灰岩、珪質頁岩、ホルンフェルス、安山岩があつた。縞片には焼けたものが多かった。石器と一緒に縄文時代後期の土器片1点（第31図11）が出土した。

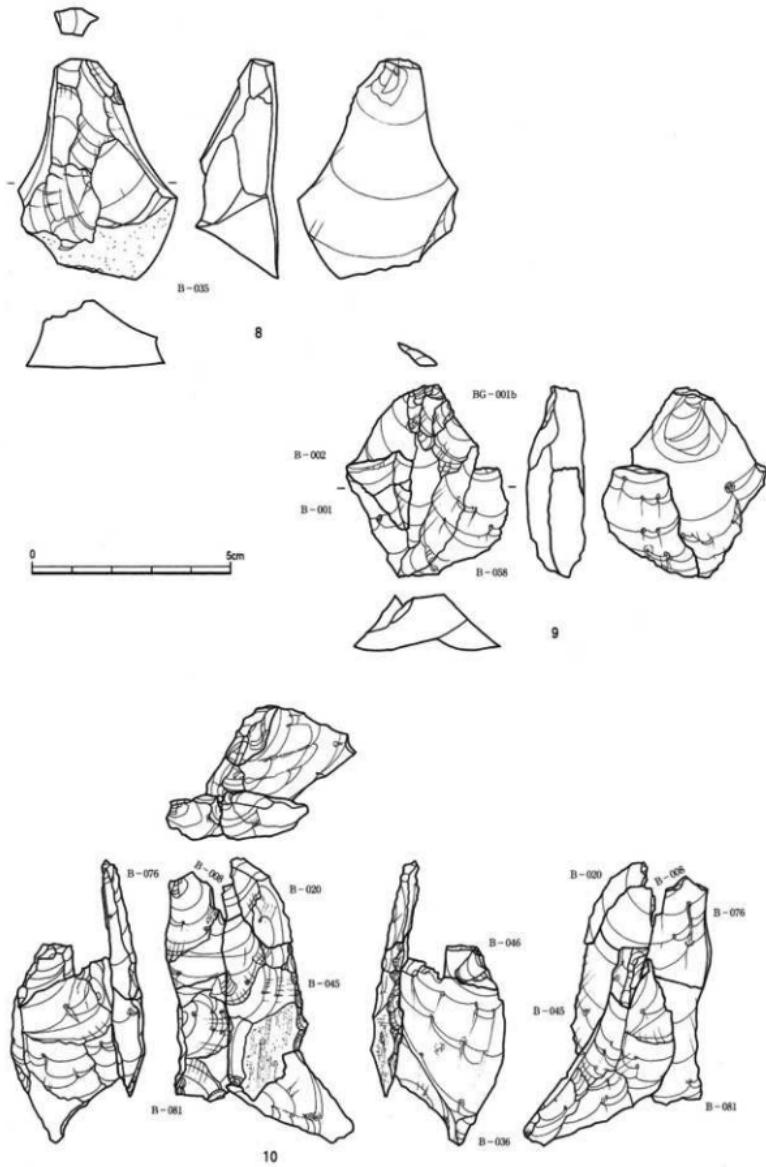
出土遺物（第28図、図版9）



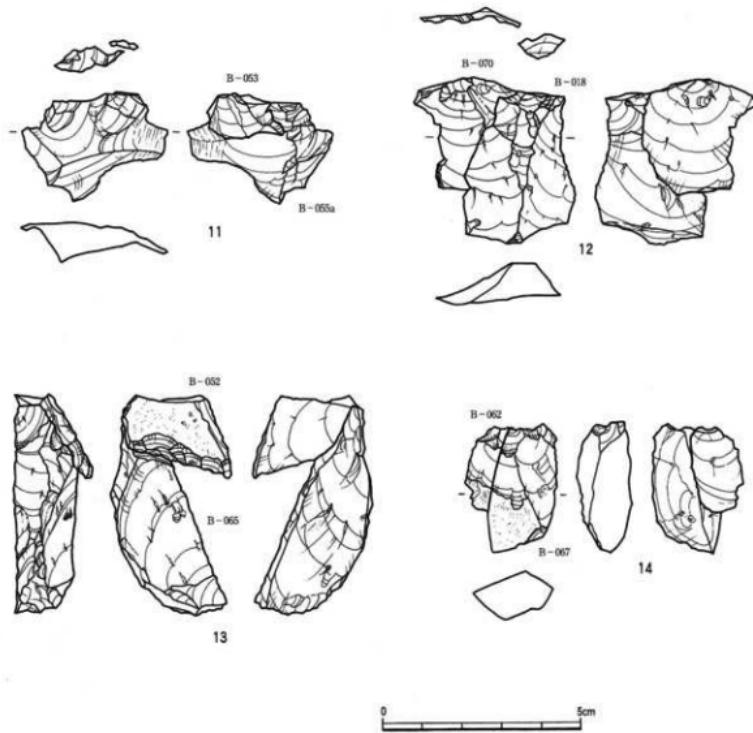
第23図 B区石器集中地点 (1/80)



第24図 B区出土石器（1）



第25図 B区出土石器（2）



第26図 B区出土石器（3）

利器として、砂岩製の使用痕のある剥片が1点あった。その他の多くは礫片で、焼けた資料が多かった。砂岩の礫片が9点あり、そのうち7点が接合した。

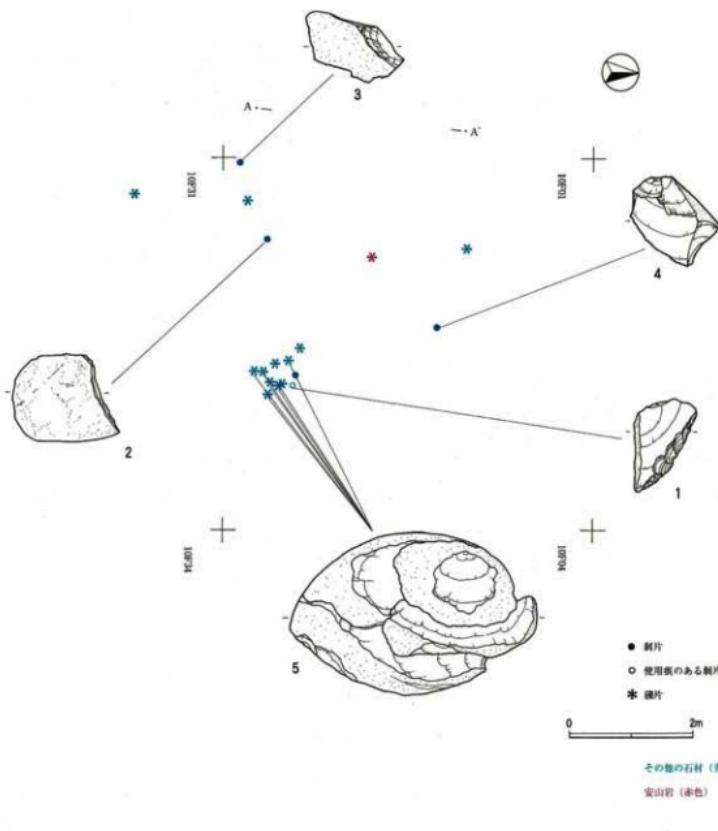
使用痕のある剥片 1は砂岩の綫長剥片で、背面右側縁に微細剥離痕が見られる。

剥片 3と4は珪質頁岩の剥片で、打面は扇状を呈する。2はホルンフェルスの剥片で、背面に原礫面が残る。

接合資料 5は、焼けた砂岩の礫片7点が接合したものである。砂岩の礫が火を受けて、破碎したものと考えられる。

第2節 繩文時代

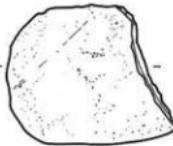
繩文時代の遺構として、調査区南側で土坑が5基検出された。それぞれの土坑の覆土中から繩文土器片が数点出土し、また掘り方が明瞭であったことから、繩文時代の土坑と判断した。



第27図 C区石器集中地点 (1/80)

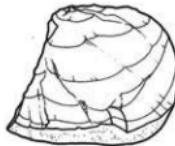


1



10F21-003

2



3



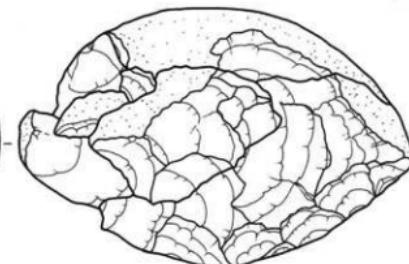
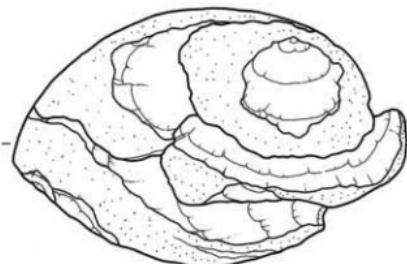
10F21-001



10F12-001

4

10F12-001



5



第28图 C区出土石器

第8表 石器組成表

A 区		B 区		C 区	
石材・器種	個数 比率	石材・器種	個数 比率	石材・器種	個数 比率
安山岩製	12 57.1%	黒曜石	93 92.1%	砂岩	11 61.1%
剥片	7	ナイフ形石器・ナイフ形石器片	2	礫片	9
碎片	5	使用痕のある剥片	2	使用痕のある剥片	1
珪質頁岩	3 14.3%	剥片	51	剥片	1
剥片	3	碎片	38	凝灰岩	3 16.7%
黒曜石	2 9.5%	珪質頁岩	5 5.0%	礫・礫片	3
剥片	1	石核	1	珪質頁岩	2 11.1%
碎片	1	ナイフ形石器	1	剥片	2
黒色頁岩	3 14.3%	剥片	2	ホルンフェルス	1 5.6%
剥片	1	碎片	1	剥片	1
碎片	2	メノウ	2 2.0%	安山岩	1 5.6%
砂岩	1 4.8%	剥片	1	礫片	1
礫	1	碎片	1	小計	18 100.0%
小計	21 100.0%	黑色頁岩	1 1.0%	縄文土器片	1
		碎片	1		
		小計	101 100.0%		

第9表 石器一覧表

遺物番号	器種	石材	縦(mm)	横(mm)	幅(mm)	重量(g)	挿図	接合	備考
A区	A-001	砾	砂岩	74.6	14.0	17.0	27.56		
	A-002	剥片	安山岩	41.0	60.0	14.8	24.65	第21図1	
	A-003	碎片	安山岩	5.0	13.5	4.7	0.37		
	A-004	碎片	安山岩	14.5	22.5	3.2	0.76		
	A-005	剥片	安山岩	38.0	20.0	4.2	1.89		
	A-006	碎片	安山岩	10.0	19.0	6.1	0.91		
	A-007	剥片	安山岩	15.0	11.5	4.6	0.69		
	A-008	剥片	安山岩	24.5	18.5	2.5	1.37		
	A-009	碎片	安山岩	10.5	6.5	1.8	0.11		
	A-010	碎片	安山岩	10.0	8.0	2.3	0.19		
	A-011	剥片	珪質頁岩	28.5	22.5	9.2	4.72	第21図5	
	A-012	剥片	安山岩	25.5	30.0	6.8	3.92		
	A-013	剥片	珪質頁岩	47.0	36.5	14.7	18.70		接合A-①
	A-014	剥片	珪質頁岩	54.0	30.5	20.5	26.24		接合A-①
グリフA	A-015	剥片	黒曜石	13.0	10.5	4.3	1.45		
	A-016	碎片	黒曜石	22.0	24.0	5.0	0.54		
	A-017	碎片	黒色頁岩	8.0	17.5	3.0	0.30		
	A-018	碎片	黒色頁岩	9.0	11.0	2.6	0.19		
	GA-001a	剥片	黒色頁岩	33.7	44.9	14.9	19.33	第21図4	
	GA-001b	剥片	安山岩	37.0	41.6	9.1	11.60	第21図2	
	GA-001c	剥片	安山岩	30.9	33.5	8.1	3.86	第21図3	
	接合資料			32.6	77.5	38.0	44.94	第22図6	A-013, A-014
B区	B-001	碎片	黒曜石	8.5	12.0	2.8	0.23		接合B-①
	B-002	碎片	黒曜石	11.0	18.0	4.5	0.69		接合B-①
	B-003	剥片	黒曜石	13.0	17.5	6.7	0.98		
	B-004	碎片	黒曜石	13.0	7.0	4.5	0.32		
	B-005	剥片	黒曜石	29.5	18.5	6.0	2.76		
	B-006	剥片	黒曜石	22.0	12.5	3.7	0.70		
	B-007	剥片	黒曜石	27.0	14.0	8.8	2.24		
	B-008	剥片	黒曜石	12.0	11.0	5.0	0.55		接合B-⑥
	B-009a	剥片	黒曜石	24.0	19.5	7.7	2.24		
	B-009b	剥片	黒曜石	18.4	16.4	4.4	1.19		接合B-⑪
	B-010	剥片	黒曜石	19.0	13.2	6.1	0.67		
	B-011	碎片	珪質頁岩	14.0	11.0	2.9	0.30	第24図7	
	B-012	碎片	黒曜石	16.5	8.5	2.8	0.32		
	B-013	剥片	黒曜石	23.2	14.6	7.2	2.06		
	B-014	碎片	黒曜石	9.5	6.0	1.9	0.06		
	B-015	剥片	黒曜石	26.4	26.2	6.4	2.78		接合B-⑩
	B-016	碎片	黒曜石	16.0	10.0	20.0	0.17		
	B-017	剥片	黒曜石	33.5	17.7	8.2	3.11		
	B-018	剥片	黒曜石	40.0	28.0	10.0	9.58		接合B-②
	B-019	碎片	黒曜石	11.5	9.0	2.4	0.15		
	B-020	剥片	黒曜石	25.0	11.0	4.6	0.89		接合B-⑥
	B-021a	碎片	黒曜石	8.0	6.0	1.1	0.02		
	B-021b	碎片	黒曜石	5.0	3.0	1.4	0.01		
	B-022a	碎片	黒曜石	19.0	12.6	3.8	0.78		接合B-⑧
	B-022b	碎片	黒曜石	6.9	5.0	1.7	0.07		
	B-022c	碎片	黒曜石	4.9	3.8	2.3	0.03		
	B-023a	剥片	黒曜石	13.0	13.0	3.0	0.46		
	B-023b	碎片	黒曜石	5.0	3.0	1.1	0.01		
	B-024	碎片	黒曜石	20.0	14.5	5.3	1.44		接合B-⑧
	B-025	使用痕のある剥片	黒曜石	28.9	19.0	9.4	2.85	第24図4	
	B-026	剥片	黒曜石	35.0	20.0	8.0	2.68		
	B-027	ナイフ形石器	黒曜石	24.0	14.0	8.8	2.66		接合B-⑤
	B-028	剥片	黒曜石	15.9	25.0	9.8	3.06		
	B-029	剥片	黒曜石	11.6	18.0	5.3	0.95		
	B-030	ナイフ形石器片	黒曜石	10.0	15.0	11.4	1.70		接合B-⑤
	B-031a	碎片	黒曜石	10.0	7.8	3.0	0.14		

B-031b	碎片	黒曜石	6.0	8.0	1.0	0.04			
B-032	剥片	黒曜石	16.0	19.1	6.1	1.10			
B-033	剥片	黒曜石	18.5	16.0	4.4	0.65			
B-034	石核	珪質頁岩	39.3	34.5	19.4	28.82	第24図5		
B-035	剥片	珪質頁岩	55.7	40.6	20.2	33.74	第25図8		
B-036	剥片	黒曜石	56.0	27.0	20.8	22.90		接合B-(6)	
B-037a	剥片	黒曜石	12.9	8.0	5.6	0.41			
B-037b	碎片	黒色頁岩	6.0	2.8	1.3	0.02			
B-038	剥片	珪質頁岩	20.4	17.1	4.0	0.86	第24図6		
B-039	剥片	黒曜石	24.0	19.5	7.7	2.45			
B-040	剥片	黒曜石	29.6	19.5	8.4	3.40			
B-041	碎片	黒曜石	9.1	10.2	1.8	0.09			
B-042	剥片	黒曜石	19.5	20.5	8.1	1.81			
B-043	碎片	黒曜石	7.0	6.0	1.7	0.07			
B-044a	剥片	黒曜石	16.0	29.0	3.8	1.35		接合B-(1)	
B-044b	剥片	黒曜石	18.0	9.7	2.4	0.39		接合B-(1)	
B-045	剥片	黒曜石	44.0	21.0	6.7	6.50		接合B-(6)	
B-046	剥片	黒曜石	12.0	18.0	4.6	0.85		接合B-(6)	
B-047	剥片	黒曜石	18.8	20.6	8.2	2.25			
B-048	剥片	黒曜石	14.0	17.0	6.1	1.17		接合B-(9)	
B-049	剥片	黒曜石	18.6	12.0	4.3	0.83			
B-050	碎片	黒曜石	9.0	8.5	1.8	0.13			
B-051	碎片	黒曜石	6.6	4.1	1.9	0.04			
B-052	使用痕のある剥片	黒曜石	28.0	25.0	7.0	5.05	第24図3	接合B-(4)	
B-053	碎片	メノウ	12.0	19.0	3.0	0.63		接合B-(3)	
B-054	碎片	黒曜石	10.0	7.5	4.4	0.35		接合B-(9)	
B-055a	剥片	メノウ	28.0	37.0	11.5	6.52		接合B-(3)	
B-055b	碎片	黒曜石	9.0	7.0	2.6	0.16			
B-056	碎片	黒曜石	10.5	10.6	2.5	0.15			
B-057	碎片	黒曜石	8.9	12.0	6.3	0.49			
B-058	剥片	黒曜石	26.0	20.0	5.9	2.90		接合B-(1)	
B-059	剥片	黒曜石	27.5	15.6	6.6	2.47			
B-060	碎片	黒曜石	14.1	6.5	2.1	0.20			
B-061	剥片	黒曜石	35.4	27.0	14.2	10.86			
B-062	碎片	黒曜石	22.0	14.0	7.4	1.88		接合B-(7)	
B-063	碎片	黒曜石	7.7	6.6	1.7	0.08			
B-064	剥片	黒曜石	12.1	11.5	3.1	0.41			
B-065	剥片	黒曜石	56.0	20.0	13.2	15.78		接合B-(4)	
B-066	剥片	黒曜石	24.0	21.5	6.5	3.06			
B-067	剥片	黒曜石	32.0	16.0	12.8	5.76		接合B-(7)	
B-068	剥片	黒曜石	15.0	13.0	3.0	0.49			
B-069	剥片	黒曜石	23.4	10.5	5.0	0.62			
B-070	剥片	黒曜石	30.0	29.0	6.9	3.84		接合B-(2)	
B-071	剥片	黒曜石	23.2	7.1	2.7	0.19			
B-072	剥片	黒曜石	8.7	12.6	6.0	0.55			
B-073	碎片	黒曜石	7.1	8.1	3.7	0.17			
B-074	ナイフ形石器	珪質頁岩	45.1	22.0	7.0	5.56	第24図1		
B-075a	碎片	黒曜石	7.5	13.1	1.8	0.12			
B-075b	碎片	黒曜石	7.8	6.5	2.2	0.07			
B-076	剥片	黒曜石	31.0	16.0	5.0	2.44		接合B-(6)	
B-077	剥片	黒曜石	21.0	15.0	3.5	0.68		接合B-(9)	
B-078	碎片	黒曜石	9.5	8.5	3.5	0.14			
B-079	碎片	黒曜石	8.0	12.0	2.8	0.13			
B-080	碎片	黒曜石	13.0	7.0	4.8	0.26			
B-081	剥片	黒曜石	31.0	16.0	6.7	3.50		接合B-(6)	
B-082	碎片	黒曜石	7.7	8.0	2.8	0.11			
B-083	碎片	黒曜石	6.0	5.5	1.6	0.05			
B-084	碎片	黒曜石	12.0	6.1	1.6	0.10			
B-085	剥片	黒曜石	13.5	13.0	2.9	0.45			

	B-086	剥片	黒曜石	26.5	23.0	7.5	4.64			
	B-087	碎片	黒曜石	6.8	9.1	2.3	0.09			
グリッドB	GB-001a	剥片	黒曜石	49.0	34.0	10.6	13.52	接合B-①		
	GB-001b	剥片	黒曜石	36.0	36.0	7.5	8.78	接合B-⑨		
	GB-001c	碎片	黒曜石	17.8	5.7	1.9	0.16			
グリッドC	GC-001	剥片	黒曜石	13.5	22.5	8.3	2.26			
接合資料	接合B-①		黒曜石	47.8	42.5	14.9	17.35	第25図9	B-001, B-002, B-058, GB-001a	
	接合B-②		黒曜石	42.0	41.0	13.0	13.43	第26図12	B-018, B-070	
	接合B-③		メノウ	28.4	37.0	11.5	7.14	第26図11	B-053, B-55a	
	接合B-④		黒曜石	55.6	30.4	20.1	20.83	第26図13	B-052, B-065	
	接合B-⑤	ナイフ形石器	黒曜石	34.6	14.7	11.1	4.37	第24図2	B-027, B-030	
	接合B-⑥		黒曜石	72.5	47.6	34.0	37.67	第25図10	B-008, B-020, B-036, B-045, B-046, B-076, B-081	
	接合B-⑦		黒曜石	33.4	23.1	14.2	7.65	第26図14	B-062, B-67	
	接合B-⑧		黒曜石						B-022a, B-24	
	接合B-⑨		黒曜石						B-048, B-54, GB-001b	
	接合B-⑩		黒曜石						B-015, B-077	
	接合B-⑪		黒曜石						B-009b, B-044a, B-044b	
C区	10F11-001	礫片	安山岩	32.6	22.3	7.1	6.47			
	10F11-002	礫片	砂岩	43.2	53.0	30.6	93.35			
	10F12-001	剥片	珪質頁岩	36.0	36.0	9.1	7.16	第28図4		
	10F21-001	剥片	珪質頁岩	28.9	39.9	9.5	6.16	第28図3		
	10F21-002	礫片	砂岩	26.0	24.0	14.6	6.68			
	10F21-003	剥片	ホルシフェルス	36.0	43.5	15.5	35.60	第28図2		
	10F22-001	礫片	砂岩	81.5	47.5	15.2	50.02		接合C-①	焼けている
	10F22-002	礫片	砂岩	52.0	54.3	23.7	45.34		接合C-①	焼けている
	10F22-003	礫片	砂岩	61.1	30.7	13.0	22.12		接合C-①	焼けている
	10F22-004	使用痕のある剥片	砂岩	37.8	25.6	4.9	3.75	第28図1		焼けている
	10F22-005	礫片	凝灰岩	52.5	60.0	39.3	103.23			焼けている
	10F22-006	礫片	凝灰岩	6.5	14.5	5.4	0.51			焼けている
	10F22-007	剥片	砂岩	58.0	16.0	8.9	8.40			
	10F22-008	礫片	砂岩	36.1	52.2	8.5	13.88		接合C-①	焼けている
	10F22-009	礫片	砂岩	44.4	30.1	5.5	8.07		接合C-①	焼けている
	10F22-010	礫片	砂岩	14.0	21.9	6.2	1.50		接合C-①	焼けている
	10F22-011	礫片	砂岩	31.4	17.5	7.3	3.35		接合C-①	焼けている
接合資料	10F31-001	土器片								
	10F31-002	礫	凝灰岩	22.5	18.2	16.3	8.37			焼けている
	接合C-①		砂岩	97.9	63.9	(28.6)	144.28	第28図5	10F22-001, 10F22-002, 10F22-003, 10F22-008, 10F22-009, 10F22-010, 10F22-011	
住居跡	SK01-003	剥片	黒曜石	19.0	20.5	5.4	1.77			

001(第29図、図版5)

調査区南東付近で検出された土坑である。直径約0.9mの円形をした土坑で、深さは確認面から0.53mであった。ほぼ垂直の掘り込みで、底面は平坦であった。

覆土中から数点の縄文土器片が出土した。

002(第29図、図版5)

土坑001の北側約5mの付近で検出された土坑である。直径約1.0mの円形をした土坑で、深さは確認面から0.64mであった。ほぼ垂直の掘り込みで、底面は平坦であった。

覆土中から数点の縄文土器片が出土した。

003(第29図、図版5)

調査区中央南側で検出された土坑である。やや不整形の直径約1.0mの円形をした土坑である。深さは確認面から0.52mであった。

遺構から遺物は出土しなかった。

004(第29図、図版5)

調査区南側で検出された土坑である。直径約1.1mの円形をした土坑で、深さは確認面から0.6mであった。

覆土中から数点の縄文土器片が出土した。

005(第29図)

調査区南端で、下層確認調査で小グリッドを発掘していた時に検出された土坑である。長軸約1.3mの不整形な土坑で、深さは確認面から0.61mであった。

覆土中から数点の縄文土器片が出土した。

出土遺物

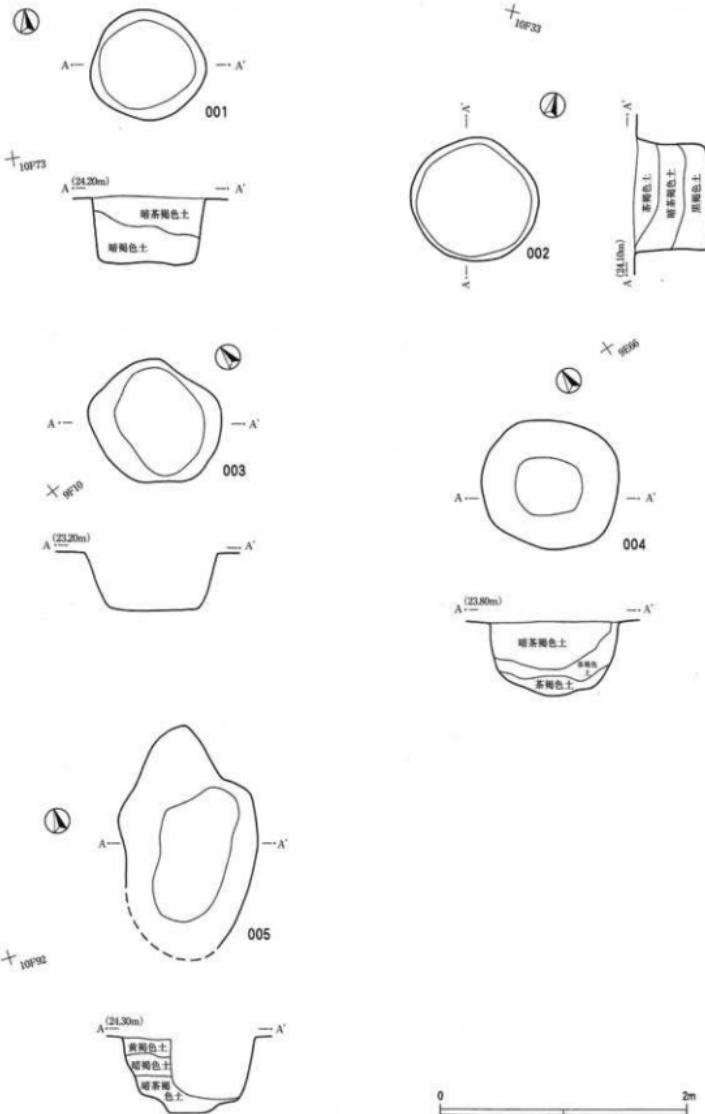
出土した遺物は、おもに縄文土器片であった。土坑から出土した遺物と、確認調査中にトレンチおよびグリッドなどから出土した遺物の、2種類に分けて報告する。

土坑出土遺物（第30図、図版10）

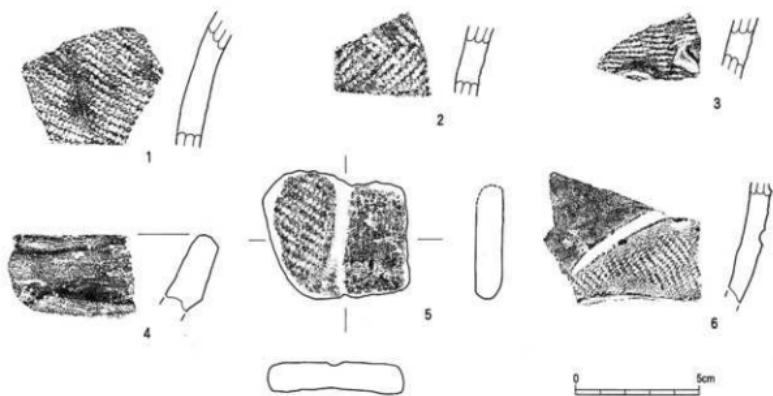
土坑から出土した遺物は少量で、すべて縄文土器片であった。1、2、3は001土坑から出土した。やや細かい縄文原体が使用されている。4、5は002土坑から出土した。4は波状のII縁部で、口縁の下に沈線が施されている。5は土器片錐で、重さは40.06gであった。6はやや細かい縄文の施文に沈線で縁取りされている。1、2は縄文時代後期の土器であろう。3は堀之内式土器、4、5はE式の土器と思われる。

トレンチその他の出土遺物（第31図、図版10）

確認調査用のトレンチおよびグリッドから少量の縄文土器が出土した。7は口縁部の土器片で口縁直下にRLとLRの羽状縄文が施文されている。10もII縁部で口縁のやや下部から縄文が施されている。11は口

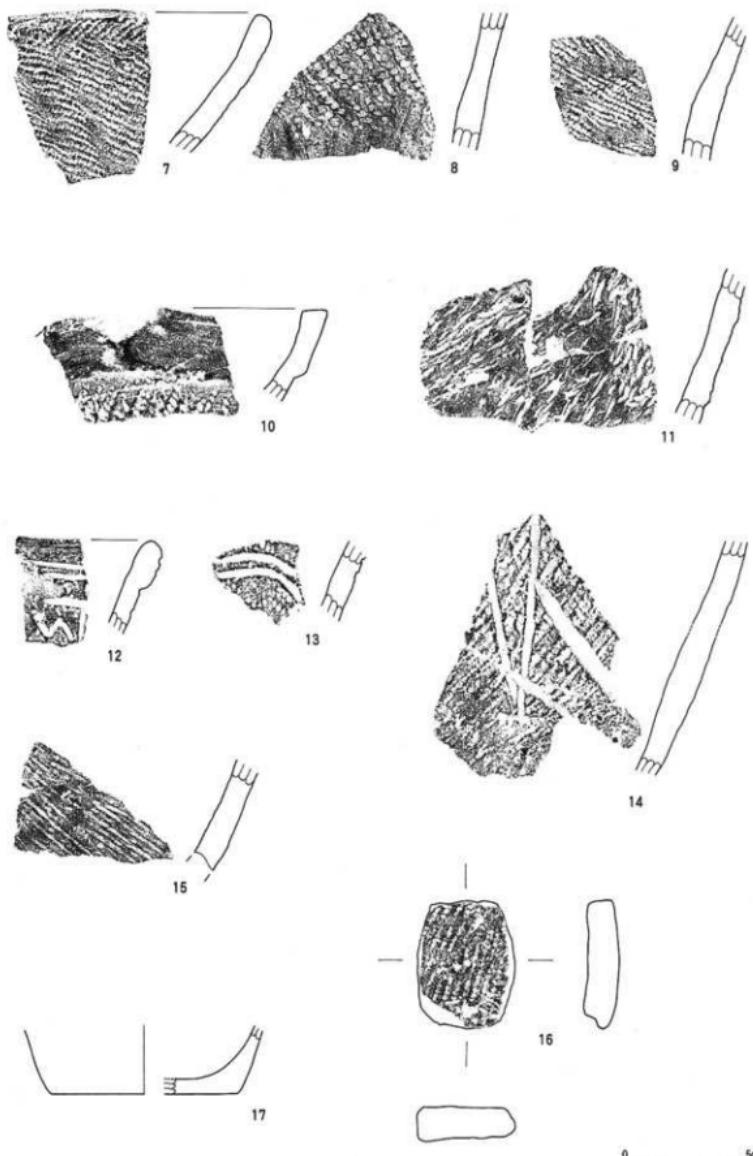


第29図 繩文時代土坑 (1/40)



第30図 土坑出土遺物

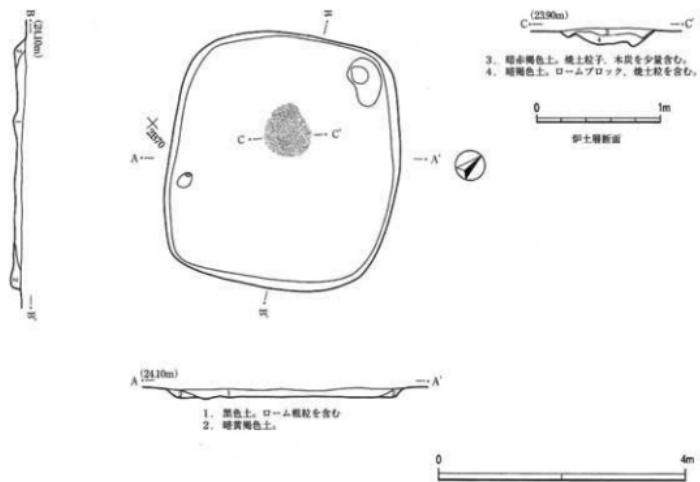
石器集中地点C区から、石器と混在して出土した土器片である。縄文時代後期の土器片で、やや粗雑な作りを呈している。12.13には沈線文が施され、土器胎土には細かい雲母粒子と白色長石粒子が含まれていた。中期初頭の五領ヶ台式と考えられる。14には、やや粗い縄文が施文された後に沈線文が施されている。後期前半の堀之内式に属すると考えられる。16は土器片錘で、重量は31.31gであった。7~10は縄文時代後期の土器と考えられる。



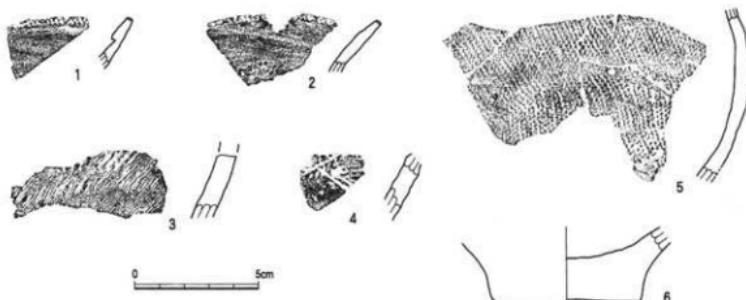
第31図 トレンチその他からの出土遺物

第3節 弥生時代

弥生時代の遺構は、調査区北側の台地縁辺部から住居跡1軒と、調査区南端から溝1条が検出された。同じ台地上の南方約300mにある八千代中央霊園・永福寺でも、多数の弥生時代住居跡と周溝墓が分布していたことが、八千代市の調査で判明している。したがって台地全面に住居と墓地からなる弥生時代の集落が広がっていたと予想された。



第32図 SK-01住居跡(1/80)



第33図 SK-01住居跡出土遺物

SK-01(第32図、図版5)

隅丸長方形をした弥生時代の住居跡で、長さ4.11m、幅3.69mであった。床面の深さは確認面から約13cmであった。主軸はN-39°-Wであった。床面にはやや凹凸があった。中央やや北側に炉址があり、北側隅と南西壁際にピットがあった。柱穴は検出されなかった。炉跡は隅丸三角形で長さ86cm、幅75cm、深さ10cmであった。北側隅のピットは、長さ75cm、幅50cm、深さ15cmであった。覆土中から黒曜石の石器1点と、少量の弥生土器片が出土した。

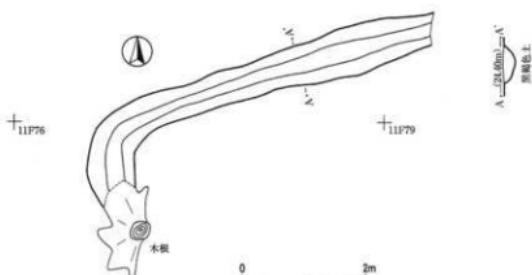
出土遺物（第33図、図版10）

出土した遺物は、石器1点と少量の弥生土器片であった。石器は黒曜石の剥片で、縄文時代以前の剥片が住居跡の覆土に混入したと考えられる。図化できた遺物は弥生土器であった。1と2は口縁部で、いずれも口縁端部に細かい縄文が施されていた。1は内側に折返した口縁である。3には撫糸文、5には縄文が施されていた。いずれも小片で、弥生時代後期の変形土器の破片と考えられる。

今回検出された住居跡は、南側約300mの八千代中央霊園・永福寺で見つかった弥生時代の住居跡とは同じ規模で、主軸方位もほぼ同一の方向であった。出土した弥生土器も弥生時代後期の破片であった。規模、方位、出土土器の時期が同じことから、今回検出された住居跡は、以前に調査された集落の一部と考えられる。台地上に形成された弥生時代の集落が、台地縁辺にまで広がっていたと判断してよかろう。

SD001(第34図)

調査区南端で検出された溝で、矩形に曲がった形状をしている。長辺約6m、幅約0.8m、深さ約0.2mであった。覆土は黒褐色土であった。遺物が検出されなかったが、確認面や周辺遺跡の構造時期から、弥生時代の溝と判断した。



第34図 SD001溝(1/80)

第4章 まとめ

向境遺跡、雷遺跡

県道（千葉竜ヶ崎線）道路改良事業にともない向境遺跡、雷遺跡、阿蘇中学校東側遺跡が調査された。向境遺跡からは溝、雷遺跡からは道路状遺構が検出された。

周辺の印旛沼南側の台地上には、長年にわたって八千代市が調査した栗谷遺跡、上谷遺跡などの大遺跡が密集し、県道はこれらの人大きな遺跡の周辺部をかすめるように南北に通っている。向境遺跡、雷遺跡の今回調査した範囲は、これら大遺跡のごく一部分であり、検出された溝や道路状遺構は、人遺跡の遺構との関連性が考えられる。

阿蘇中学校東側遺跡

阿蘇中学校東側遺跡の周辺では、様々な開発行為にともなう発掘調査が実施された。それぞれの調査は、台地全面を発掘するほどの大規模なものではなく、台地上面の部分的な調査にすぎない。しかしながらそれらの調査成果を総合すると、特に弥生時代の集落が台地上に広がっていたと判断されている。

今回の調査で、旧石器時代の石器集中地点3か所、縄文時代の土坑5基、弥生時代の住居跡1軒と溝1条が検出された。調査前まで、旧石器遺跡の存在は付近の台地上で知られていなかったので、今回の調査による新しい知見と言えよう。

旧石器時代の行器集中地点は、A区、B区、C区の3か所で確認された。A区とB区は相互に比較的近い距離に位置し、しかもおもにIV層から石器が出土した。だが石器の石材について、A区ではおもに安山岩が主体をなし、B区ではほとんど黒曜石であった。A区とB区の石材に大きな違いが見られるものの、一応、両者を同一の文化層と考えておく。

A区・B区の石器出土層位がIV層で、石器組成にナイフ形行器が含まれ、尖頭器が組成に含まれていないことなどから、A区・B区の石器文化層をIV層上部もしくはIII層下部としておく。C区は、A区・B区とはやや離れた地点に位置している。また出土した石器も、おもにIII層上面の、黒色土層とソフトロームの交わる付近から多く出土したので、A区・B区とは別な新しい文化層に属すると思われる。

阿蘇中学校東側遺跡の西北約600mに位置する雷南遺跡ではIII層上部の旧石器が検出された。したがって阿蘇中学校東側遺跡の旧石器の文化層は、雷南遺跡よりもやや古い様相を示していると言えるだろう。

縄文時代の土坑は5基検出された。いずれも直径1m前後の小規模な土坑である。阿蘇中学校東側遺跡の平成10年度の調査や、付近の赤作遺跡、雷南遺跡でも縄文時代の土坑、竪穴が確認されている。今回検出された土坑もそれに類した遺構と考えられる。

調査区北側で検出された弥生時代後期の住居跡は、これまでに台地南側の八千代中央電線で見つかっている弥生時代の集落に連なる住居と考えられる。小さな谷を挟んで東南台地上の平沢遺跡でも、同時代の集落が確認されている。また、阿蘇中学校東側遺跡から北へ約1kmの地点に位置する上谷遺跡、栗谷遺跡、雷南遺跡などでも、弥生時代の集落が確認されている。

阿蘇中学校東側遺跡と上谷遺跡との間に八千代ゴルフクラブの土地から、弥生時代の住居跡が検出される可能性が十分に考えられる。すると、印旛沼南側の台地一帯で、弥生時代の大集落が広大な範囲で営まれていたことになる。付近一帯では古墳時代から歴史時代にかけても大集落が形成され、下総国の重要な拠点であったと考えられている。その淵源が弥生時代にまでさかのぼると見えるだろう。

写 真 図 版



遺跡周辺航空写真（1967年）



向境遺跡、溝



1



2



3

向境遺跡出土遺物



雷遺跡、道路状遺構



阿蘇中学校東側遺跡、調査前風景

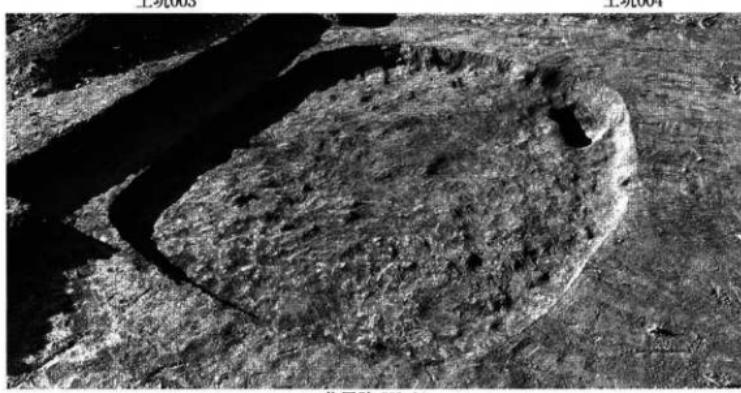
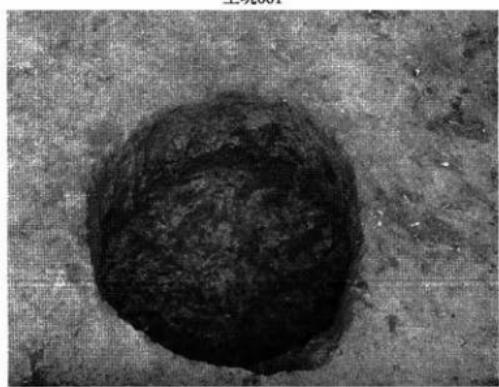
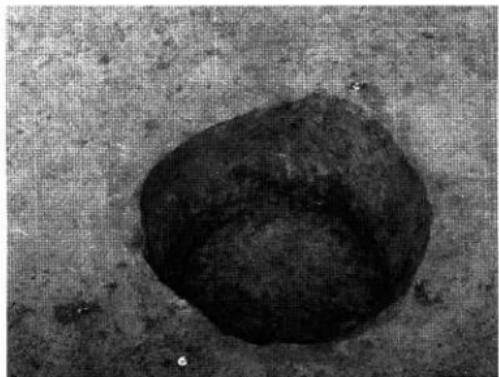


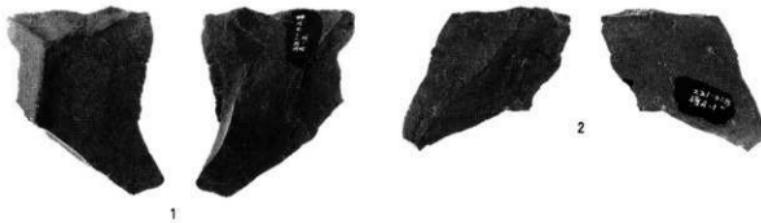
調査風景



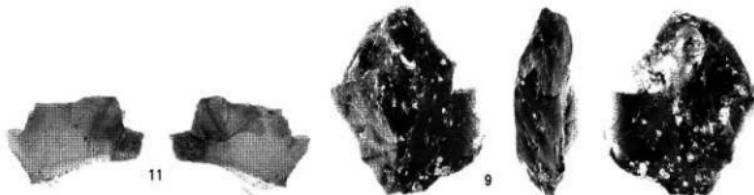
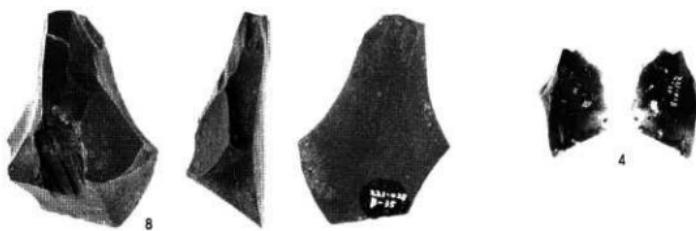
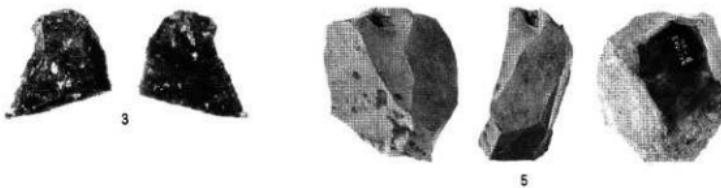
旧石器時代石器集中地点 A 区







A区出土旧石器



B区出土旧石器（1）



B区出土旧石器 (2)



1



2



3

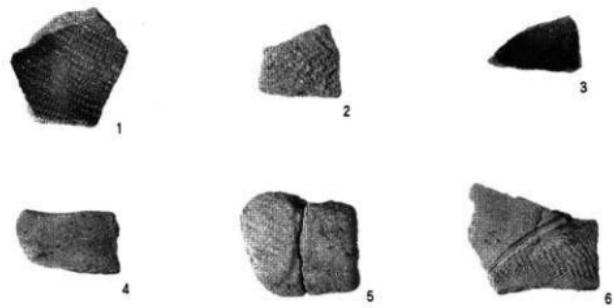


4

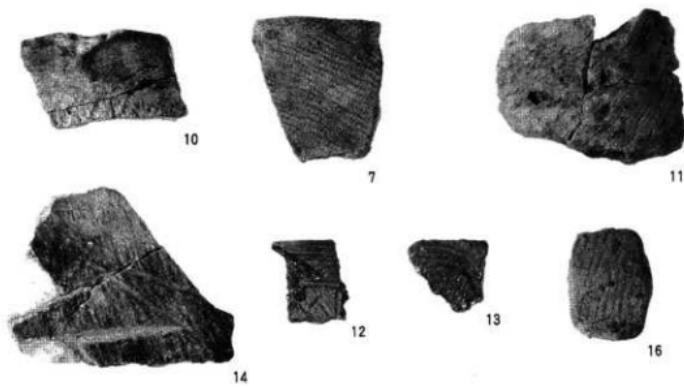


5

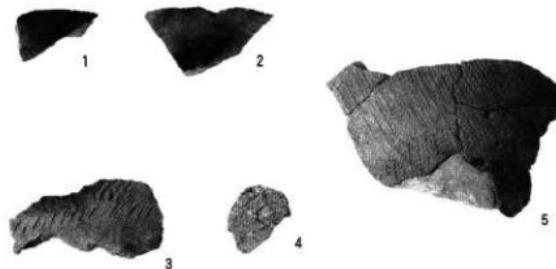
C区出土旧石器



縄文時代土坑出土遺物



トレンチなどの出土遺物



弥生時代住居跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	やちよしむかいかいさかいいせき・らいいせき・あそちゅうがっこひがしがわいせき
書名	八千代市向境遺跡・雷遺跡・阿蘇中学校東側遺跡
副書名	県単道路改良委託(幹線道路網整備)(主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査)
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第562集
編著者名	森本和男
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL043-424-4848
発行年月日	西暦2007年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むかいかい 向 境 遺 跡	ちばけん や ちよし 千葉県八千代市 かのとあざきた の だい 神野字北ノ台	221	023	35度 45分 40秒	140度 7分 40秒	19990701 19990716	103m ²	道路建設
らい 雷 遺 跡	ちばけん や ちよし 千葉県八千代市 よなもとあざしもじゅくひがし 米本字下宿 東	221	025	35度 45分 8秒	140度 7分 34秒	19990716 19990731	1,200m ²	道路建設
あそ 阿蘇中学校 ひがし 東側遺跡	ちばけん や ちよし 千葉県八千代市 あそとあざひがし 米本字平沢2773 ほか	221	028	35度 44分 38秒	140度 7分 47秒	20041116~20041215 20051101~20051115 20060620~20060630	2,495m ² 1,670m ² 429m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
向境遺跡	包含層		溝 1条	縄文土器 弥生土器				
雷遺跡	包含層	中世	道路状遺構 1条	陶器				
阿蘇中学校 東側遺跡	散布地 集落跡	旧石器 縄文 弥生	石器集中 土坑 住居跡 溝	3地点 5基 1軒 1条	ナイフ形石器、 石核、剥片、礫片 縄文土器 弥生土器			

千葉県教育振興財団調査報告第562集
八千代市向境遺跡・雷遺跡・阿蘇中学校東側遺跡
-県単道路改良委託(幹線道路網整備)(主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査)-

平成19年2月28日発行

編 集 財團法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 千葉県千葉地域整備センター
千葉市中央区市場町1-1

財團法人 千葉県教育振興財団
四街道市施渡809番地の2

印 刷 株式会社 弘 文 社
市川市市川南2-7-2